

サウチ遺跡

1978

笠利町教育委員会

正誤表

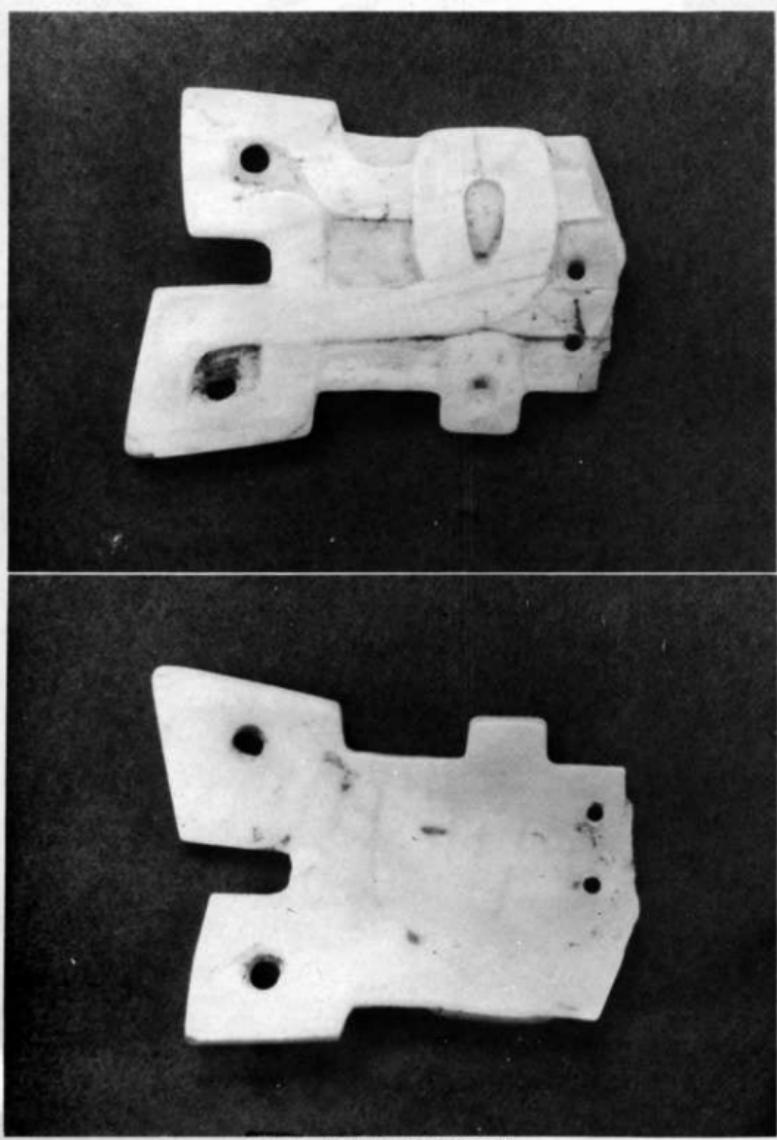
		誤	正
P. 1	11行	……今井真彦……	……今井貞彦……
P. 10	18行	林昌一 登山忠仁	林昌一・登山忠仁
P. 18	9行	おこなった。(第17図参照)	おこなった(第17図参照)。
P. 18	28行	E・6杭	E・M杭
P. 28	8行	図版第18下	図版第一二下
P. 39	5行	第29図7	第29図5
P. 39	17行	(第80図5)	(第80図15)
P. 42	16行	図版第二二2・8	図版第二二1・2
P. 52	7行	図版第二五両刃……	図版第二五2両刃
P. 52	18行	図版第二五南地区	図版第二五1南地区
P. 54	7行	図版第二五長さ	図版第二五5長さ
P. 54	21行	図版第二五幅	図版第二五7幅
P. 54	27行	図版第二五B-II	図版第二五6B-II
P. 55	29行	図版第二五の石器	図版第二五の石器

訂正

P. 12	第5図	図4層左端に 2箇挿入
P. 13	第6図	図3層左上に 2箇挿入
P. 32	第24図	図4.4.6Mに図4.4.6B←記入
P. 36	第10図	1~4・6・7:土器 5:獸骨
P. 108	第87図	数10 抹消 11→10 12→11 13→12 14→13 15→14 16→15 17→16 18→17 に訂正



北地区5层出土弥生式土器



サウチ遺跡南地区探集貝札

目 次

第1章 序 説	8
1. 遺跡の立地と環境	8
2. 調査の経過	5
第2章 発掘調査	11
1. 遺跡総説	11
2. 各地区の調査	12
a. 第1地点北地区の調査	12
b. 第1地点東南地区の調査	16
c. 第1地点南地区の調査	25
d. 第2地点Aトレンチの調査	80
e. 第2地点Bトレンチの調査	80
f. 第2地点Gトレンチの調査	81
第3章 遺構・遺物	33
1. 遺 構	33
2. 遺 物	38
a. 人工遺物（土器・土製品・石器・貝器）	38
b. 自然遺物（人骨・獸骨・貝・魚骨）	63
第4章 総 括	72

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図	4	第27図 糸口	51
第2図 サウチ遺跡周辺図	6	第28図 北地区 5層出土土器	94
第3図 サウチ遺跡第1地点図	9	第29図 北地区 5層出土土器	95
第4図 北地区北側壁面図 (B+C+D+E-II線)	12	第30図 北地区 5層出土土器	96
		第31図 北地区 5層出土土器	97
第5図 北地区西側壁面 (B+I+II+III)	12	第32図 北地区 5層出土土器	98
第6図 C-IV地区採土地区北側壁面図	18	第33図 北地区 5層出土土器	99
第7図 北地区8層内遺物出土状況	14	第34図 北地区 5層出土土器	100
第8図 C-I・5上板状 ピーチロック出土状況	16	第35図 北・東南・Gトレンチ出土土器	101
第9図 B-II区住居址実測図	84	第36図 北地区 8層出土土器	102
第10図 B-II区縄群を有するピット実測図	86	第37図 南地区 9層・7層出土土器	103
		第38図 東南地区 8層出土土器	104
第11図 B-II・5下弥生土器出土状況	87	第39図 東南地区出土土器	105
第12図 B-II・III・5下 pit 実測図	85	第40図 Gトレンチ出土土器	106
第13図 第1地点南地区地層図	25	第41図 サウチ遺跡出土石斧・貝器	107
第14図 東南地区と南地区的関係地層図	25	第42図 サウチ遺跡出土石器	108
第15図 南地区9層遺物出土実測図	29	第43図 サウチ遺跡出土石器	109
第16図 C-IV区ピット実測図	28	第44図 サウチ遺跡出土石器	110
第17図 第1地点東南地区試掘トレンチ・ 本調査地区配置図	17	第45図 サウチ遺跡出土石器	111
		第46図 サウチ遺跡出土貝製玉飾	57
第18図 第1地点東南地区グリッド東壁層位 断面図	19	第47図 サウチ遺跡出土貝・牙器	112
第19図 第11層上面遺物・礫断面図	23	第48図 サウチ遺跡出土貝器1	113
第20図 第11層上面遺物・礫断面図	19	第49図 サウチ遺跡出土貝器2	114
第21図 第11層中一下部遺物・縄出土状況	24	第50図 サウチ遺跡出土貝器3	115
		第51図 サウチ遺跡出土貝器4	116
第22図 第11層中一下部遺物・礫断面図	19	第52図 サウチ遺跡出土貝器5	117
第23図 Gトレンチ東壁実測図	81	第53図 サウチ遺跡出土貝器6	118
第24図 G-II区人骨出土図	82	第54図 土器文化の接觸と変容	119
第25図 貝札と石鏃	56		
第26図 紡錘車	50		

図版目次

図版グラビア表頁	北地区 5層出土弥生式土器	図版第二三	北地区・Gトレンチ出土土器	142	
		図版第二四	北地区・Gトレンチ出土土器	143	
図版グラビア裏頁	南地区採集貝札	図版第二五	北地区・南地区出土石器	144	
図版第一	サウチ遺跡	2	図版第二六	北地区・東南地区・Gトレンチ出 土貝器	145
図版第二	北地区地圖	121	図版第二七	穿孔した貝	146
図版第三	住居址とピット	122	図版第二八	第1・第2地点出土貝・牙器	147
図版第四	北地区遺構	123	図版第二九	東南地区・南地区・Gトレンチ出 土貝匙	148
図版第五	北地区疊群を有するピット	124	図版第三〇	北地区・Gトレンチ出土土器底面 拓影	149
図版第六	北地区 5層出土状況	125	図版第三一	サウチ遺跡出土人骨	150
図版第七	北地区遺物出土状況	126	図版第三二	サウチ遺跡出土人骨	151
図版第八	北地区 5層出土遺物	127	図版第三三	サウチ遺跡出土魚骨1	152
図版第九	南地区遺構	128	図版第三四	サウチ遺跡出土魚骨2	153
図版第一〇	東南地区 8層出土状況	129	図版第三五	サウチ遺跡出土魚骨3	154
図版一一	東南地区 8層出土状況	130	図版第三六	サウチ遺跡出土魚骨4	155
図版一二	東南地区と南地区	131	図版第三七	サウチ遺跡出土魚骨5	156
図版一二三	第2地点と南地区・Gトレンチ出 土状況	132	図版第三八	サウチ遺跡出土魚骨6	157
図版第一四	Gトレンチ壁面と埋葬人骨	133	図版第三九	サウチ遺跡出土魚骨7	158
図版第一五	北地区 5層出土土器	134	図版第四〇	サウチ遺跡出土魚骨8	159
図版第一六	東南地区 8層出土土器	135			
図版第一七	北地区出土遺物	136			
図版第一八	第1地点出土土器	137			
図版第一九	北地区 5層出土土器	138			
図版第二〇	北地区・Gトレンチ出土土器	139			
図版第二一	北地区出土土器	140			
図版第二二	北地区 5層出土土器	141			

表 目 次

第1表	石器出土一覧表	55
第2表	貝器出土一覧表	62
第3表	獸骨一覧表	65
第4表	貝類一覧表	67
第5表	奄美サウチ遺跡出土魚骨分類表	69
第6表	拂因遺物一覧表	76
第7表	因版遺物一覧表	87

序

昭和51年笠利町崎原海岸砂丘における砂利採掘によって、サウチ地区が先史遺跡であることが判明致しました。当町では、近年の開発による埋蔵文化財の消失の例が、奄美諸島においても頻発し、強い関心を有していたおりから、サウチ遺跡の処置については種々手をつくしてきました。幸い文化庁並に県教育委員会の懇切な指導援助を得て、昭和52年8月その発掘調査を実施することができました。

本書はその報告書であります。おおかたの御利用を頂ければ幸と存じます。

おわりに担当された各先生並に関係者各位に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和58年1月

笠利町教育長 西 忠 茂

例　　言

1. 本書は、昭和52年8月8日より22日まで20日間にわたり実施した大島郡笠利町崎原に所在するサウチ遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は笠利町教育委員会が主体者となり、文化庁・鹿児島県教育委員会が協力した。
3. 本書は河口貞徳が編集し、執筆には、河口貞徳・出口浩・本出道輝があたり、本文の末尾にそれぞれ又責を記した。
4. 調査中の実測図の作成は出口浩・本田道輝・中山清美が行ない、地形図の測量には牧野哲郎があたった。
5. 遺跡・遺物の写真撮影は河口貞徳が行ない、遺物の整理・実測・製図のうち、土器については河口があたり、石器・貝器・その他については河口・出口が担当した。
6. 自然遺物については、人骨は長崎大学医学部内藤芳萬教授、獸骨は鹿児島大学農学部大塚周一教授・西中川敏助教授、魚骨は鹿児島大学水産学部今井真彦教授および四宮明彦助手、貝類は鹿児島大学平田国雄名誉教授、石器は鹿児島県教育センター兒島正憲研究主任に同定と所見をいただいた。記して謝意を表する。



近景

遠景



サウチ遺跡・道路右側

第1章 序 説

1. 遺跡の立地と環境

サウチ遺跡は笠利町喜瀬字サウチにある、奄美大島は奄美諸島のなかで、徳之島と共に地形が高く複雑なのが特徴で、比較的新しい地質時代に起った島の沈降によって海岸線の出入が多く複雑であり、湾奥にひらいた谷は平地が狭く孤立しており、他地域との交通には谷にそって峰を越えるか、尾根を伝って迂回しなければならない。したがって耕地も狭く、比率は奄美諸島中最低で約6%にすぎない。島の大半は800~400mの山稜をもつ山地からなり、浸食谷は若く、中流以下は急崖となり、谷底は狭く、川の流水量は少ない。海岸は山地がせまり急傾斜で山裾が直ちに海に没している。

このような地形に制約されて、先史時代の遺跡の立地はほとんど湾奥の小平地にできた砂丘にかぎられた観がある。

しかしこのような地形的特徴をもつ奄美大島のなかで、赤尾木地峡部以北に位置する笠利半島は北部と対称的で、山地は低く丘陵性を呈し、半島最高の高嶺が188.6m、つづいて大刈山が180.7m、錦山175mと低く、それらの谷間によって分離孤立している状態である。

これらの山麓には標高数拾mの海岸段丘がひろがり、平坦な地貌を呈している。

海岸線は、西岸の笠利湾にのぞむ地域は、水平段階に富むが、他はすべて単調で出入りが少なく、砂浜が長く続き、その間に点々と磯浜をまじえている。東岸は砂丘がよく発達し、その背後に集落が多く形成されている。

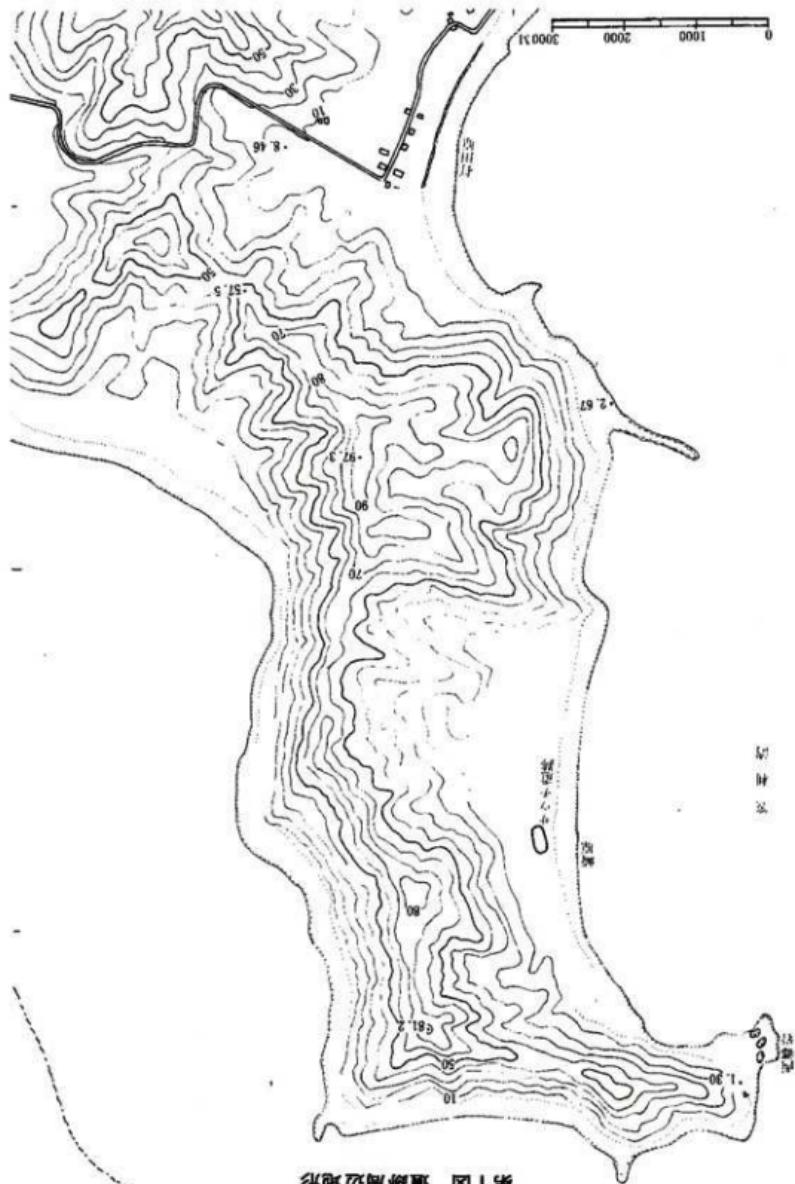
西岸の地形は南部に類似し、山地が海にせまり山脚は急傾斜をなして直ちに海に没している。海岸は磯浜が多く、谷口には三角州が形成され、ここに集落が立地している。

地質についてみると、奄美大島は古生代の粘板岩・砂岩層と花崗岩類を主とする深成岩からなり、西南部には古生代の珪岩層が分布している。

笠利半島では大半が古生代の頁岩層からなり、東岸の一部に古第三紀の砂岩頁岩層、明神崎から手花部の方向に帶状の花崗岩層の分布が見られる。

先史時代の集落立地も現代とまったく同じ傾向がみられ、東海岸では海岸段丘に多く遺跡が成立しており、北より用・アヤマル・宇宿・高又・宇宿小学校校庭・ウフタ・ナビロの諸遺跡はいずれもこの条件にあてはまる。ただ南端のヤーヤ遺跡だけは隆起珊瑚礁の崖下にできた洞穴に立地し、他と異なるが、同様な立地条件は沖縄県の諸遺跡に見られる。

西海岸では從来遺跡地が見られなかったが、サウチ遺跡が最初の発見地となった。これらの諸遺跡のなかで、ヤーヤ洞穴出土のヤブチ式土器は、最近の沖縄県渡口東原遺跡の調査結果から見ると、最も古い時期のものと見られ、昨年夏熊本大学によって調査された高又遺跡からは轟式土器及び曾畠式土器が発見されたと伝えられるところから、ヤーヤ洞穴につぐ古い時期に成立した遺跡であろう。すでにアヤマル遺跡において、曾畠式土器が採集されていたが、今回の調査は、この時期の文化の存在を実証すると共に、その分布も広いことを示すものであった。宇宿貝塚は龍文後期の市来式土器と宇宿下層式土器を共伴し、高又以後にあたる。この間若干の空白が考えられる。用遺跡は新しいと考えられている兼久式土器を出土している。



第1图 遵海围垦地形

サウチ遺跡は笠利湾に細長く突き出した半島の先端に近く、西岸に発達した崎原砂丘に立地している。遺跡地は本来民宿サキバルビーチから、発掘地点よりやや南まで、南北約120m、東西40mの範囲であったと思われるが、民宿の敷地は削平されて遺跡が消滅しており、現在遺跡の範囲は、南はGトレンチ付近より、北はソテツ畠に至る地域で、西は削平された畠地を境界とし、東は弧状に走る里道に囲まれた紡錘形の区域で、南北90m、東西40mの範囲であるが、一部は里道より東に及んでいる（第1図・第2図）。

砂丘は海岸に面して南北に腹線が走り、内陸へ向かって傾斜している。遺跡地では、砂の採掘区の西端付近に最高点があり、標高9.2mを測り、里道へ向かって傾斜し、南端部では約4m、中程の東端部では5.5m、北端部では約6.5mである。

砂丘の内側はあさい谷で低地がひろがり、里道に沿って数軒の屋敷跡があり、これを畠地が囲んでいる。谷の南縁には小川があり、流れに沿って水田の跡が見られる。谷の奥には湧水があり、この一つは現在民宿の水源として使用されている。ここには近年までサウチ集落があったのである。

サウチは、北・東・南の三方に背後から急にそそり立つ山地をひかれ、夏季の台風には殆んど影響を受けない。しかし西にひらいた地形から、12月の末から1・2月にかけて、とくに猛威をふるう冬の季節風は、サウチ集落にとって強敵であったろう。集落は前面の砂丘を防風堤として立地した。サウチ遺跡もまったく同じ条件のもとに成立したもので、海岸に面する腹線を界として、その内側に成立している。現在民宿の敷地となっている区域は、もとは砂丘の一部であったが、民宿建設のために約2mの深さまで削り取られた。この時に現在の民宿家屋の南よりの地点（炊事場付近）、北端の花壇中央（物干台木付近）、入口のガジュマルの付近（Gトレンチ付近）などからは埋葬人骨が発見されている。おそらくこの区域は遺跡地の南端に位置し、埋葬地として使用されたものであろう。尚背後の山麓地帯にも遺跡が形成された可能性があり、将来調査する必要がある（第1図・第2図）。

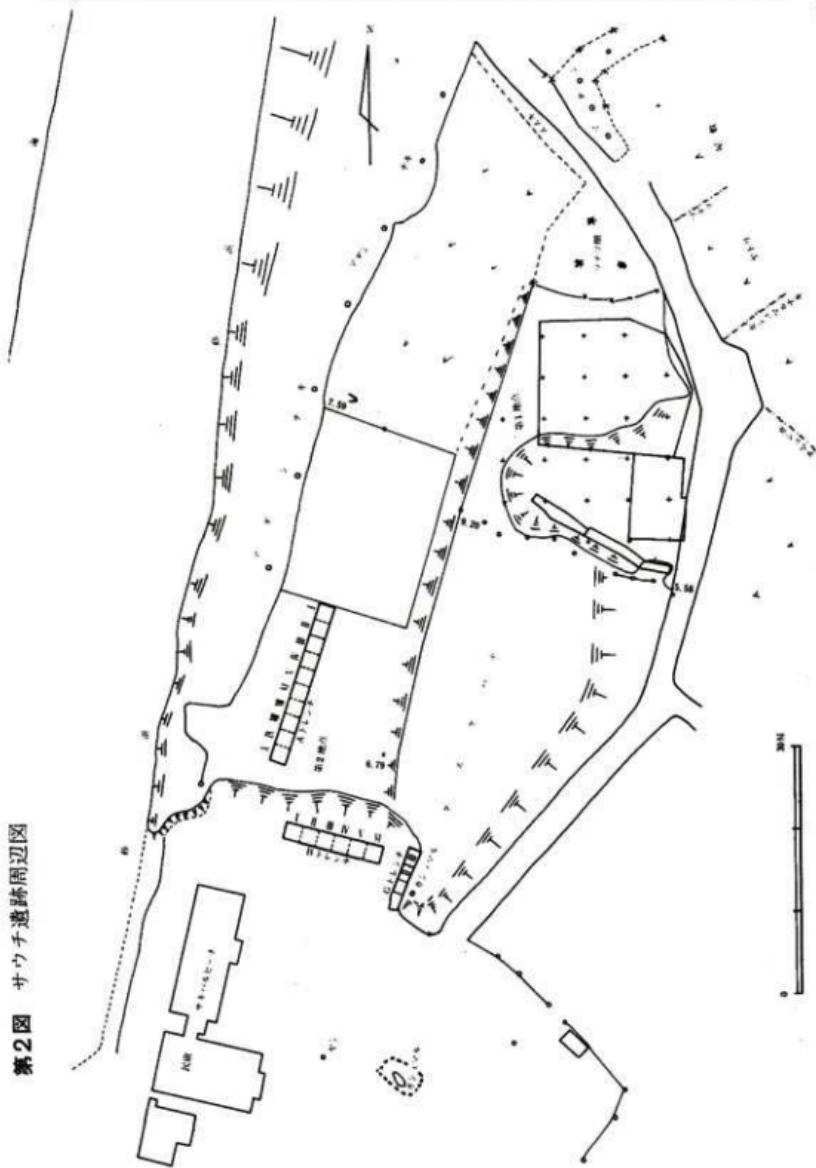
（河口）

2. 調査の経過

サウチ遺跡は砂の採掘が契機となって発見された。昭和51年4月より、赤木名在住の建築業原永貞盛は、所有地笠利町喜瀬字サウチ886番地・畠地（海岸砂丘）より、コンクリート用砂の採掘を行なった。砂の採掘は小型ブルドーザーによって、原永貞盛の手によって行なわれ、間口20m、奥行22mの台形状約800m²の範囲、原永貞盛所有地（776m²）の南半分におよんだ。この工事によって遺物包含層・遺構などが破壊され、遺物が探土現場に露呈されるに至った。

昭和51年7月8日原永貞盛は遺物に気付き、当時法政大学学生中山脩美宅に持参した。夏季休暇で帰省していた中山は、遺跡を確認し、同遺跡より、土器・磨製石器などを採集した。中山は後に、

第2図 サカチ遺跡周辺図



サウチ遺跡の資料を対象として、大学の卒業論文を執筆した。

続いて奄美考古学会員里山勇広も、同じく砂取場より貝札1個を探集した。

昭和51年8月5日 笠利町教育委員会より、サウチ遺跡について連絡を受けた県文化課では、当時笠利町に出張中の文化課職員牛ノ浜修主事に連絡して、昭和51年8月6日サウチ遺跡の確認を行なわせた。この時土器若干が採取され、遺物包含層の撮影が行なわれている。

この間も砂の採掘は徐々に進められていたが、笠利町教育委員会の要請によって、地主原永貞盛は、昭和51年8月24日付をもって「サウチ遺跡発見届」を提出している。しかし砂の採掘はなお繼續しており、笠利町教育委員会は、昭和51年8月31日、原永貞盛に対し、砂採掘の中止によって遺跡の破壊をとどめるよう協力要請の公文書を届けている。

以後笠利町教育委員会は文化庁および県文化課の指導を受けて、サウチ遺跡の緊急調査へむかって、準備をととのえていった。県文化課は事前調査のため、昭和52年4月14日、戸崎勝洋研究員・青崎和恵主事の両名を現地へ派遣した。

なおこの他に、熊本大学教授白木原和美は、昭和51年8月に実施された鹿児島短期大学付設南日本文化研究所の名顧市総合調査団に属して調査実施中に、サウチ遺跡の情報を得て現地を訪れ、前記の中山清美・里山勇広等の採取した遺物(貝札・土器)などを記録し、遺跡を再認した(52年8月20日付白木原届書類)。

ちなみに中山清美は、昭和50年9月25日同遺跡において土器片数点を採取し、遺跡名を「崎原」とした。5万分1地形図に崎原とあり、これによったものであろう。後笠利町教育委員会の調べにより「サウチ遺跡」と改められた。

昭和52年度国及び県の補助事業として「サウチ遺跡」の緊急発掘調査実施が決定し、県文化課は、昭和52年7月8日県文化財審議委員河口貞徳を出張させ、笠利町教育委員会と「サウチ遺跡」の発掘調査について打合せを行なった。

本遺跡において採取された貝札や弥生式土器片らしい遺物は学界の興味を引き関心をもたれる一方、地元研究者も調査の結果に大きな期待をよせ、自づから協力態勢がもりあがってゆき、笠利町教育委員会では、はじめて主催する遺跡発掘事業ということでおこる種々の障害を克服し、教育委員会の絶力を結集した調査態勢ができあがった。

発掘予定地のうち既に砂の採掘が行なわれていた南部以外は、アダン・ソテツ・松などの植物が鬱蒼と繁茂し、中にハブが潜んでいることも充分考えられた。そこで本調査前に植物と表皮を除去することとし、原永貞盛に依頼し、小型ブルドーザーを使用して、2日間の作業により所期の結果を得た。

発掘調査は昭和52年8月3日に開始し、当初の予定通り20日間をついやして、同月22日に終了した。発掘対象は笠利町崎原サウチ886番地、地目番、原永貞盛所有地776m²である。この地盤を第1地点と名づけ、東西と南北方向の線により5mの方眼状に区画し、南北線をA~Fで、東西線を1~8で表示し、5m四方の正方形で囲まれた各区域を調査単位として、例えばA-1区のごとく、その区域を囲む東側の線を表わすアルファベットと、北側の線を表わす数字を連結してその区域の表示とした(第3図)。

調査は先づ砂の採掘によって掘り下げられた低地に、遺物包含層・遺構などが残存しているかどうかをたしかめるために、1m四方のボーリング調査を4ヶ所について行なった(第17図)。試掘の結果、道路側のD線以西で、V線とW線に囲まれる範囲(D-V・D-W・E-V・E-W区)に遺構が残存しているらしいことが判明したので、この地区を東南地区と称することとし本田道輝・中山清美が担当調査した(第2図・第3図・第17図)。

北側の未発掘地区は、発掘によって生ずる崖の崩壊によって、隣接地との境界を侵すことを予防するため、境界線より約5mをひかえてB線より以西道路までと、II線以南の砂採掘区域までの範囲を調査することとし、北地区と称した。後第3図に示す通り一部拡張を行なった。北地区は、はじめ出口浩が担当したが、東南地区の調査終了にしたがって、中山清美・本田道輝が援助した(第3図)。

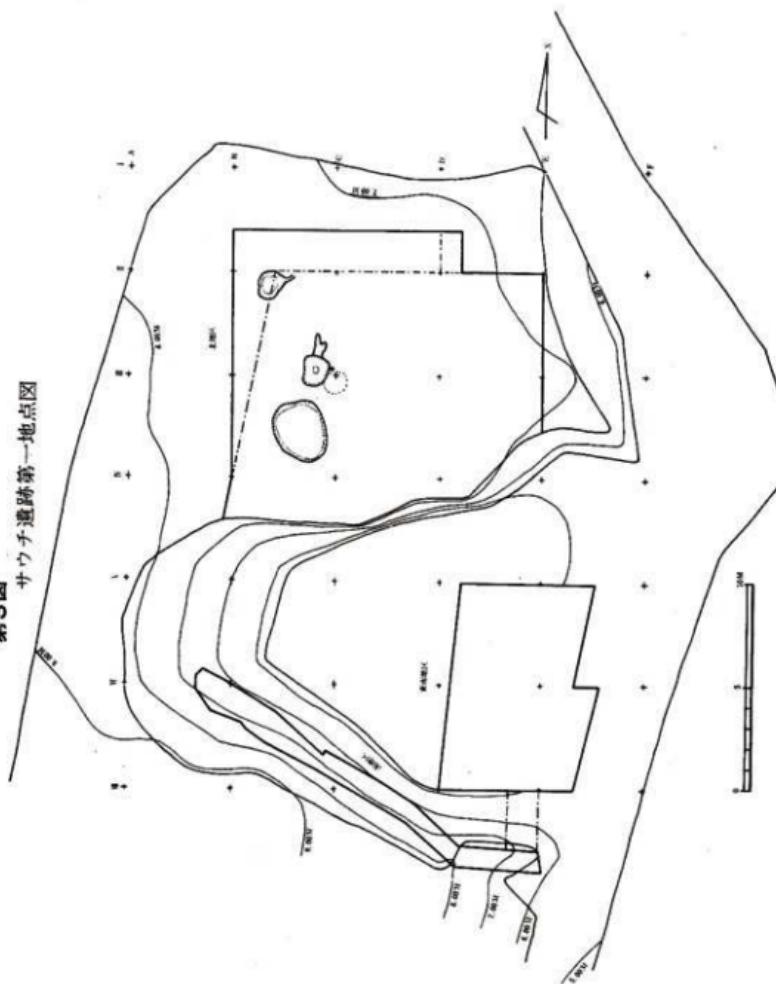
北地区的調査では第8層と第5層に、はさまれた厚い無遺物層の除去および、下層部の遺物包含層の有無探索のためにブルドーザーを使用した。

砂採掘地の南側は崖面を形成しており、ここに貝殻などを出土した包含層が露呈していた。

事前調査者や地元関係者も、この崖面から隣接する村田市熊所有の喜瀬サウチ3626番地畠(459m²)が遺跡の中心部であることを、口をそろえて伝えた。そこで地層をたしかめることを主目的として、南側崖下を約1m幅で、崖面に沿って調査した。この区域を南地区と称し、河口貞徳が担当し、中山清美が援助した(第8図)。

8月18日 第1地点の調査は終了したので、遺跡地の範囲を明らかにするために、第1地点の西南、牧野周吉所有地喜瀬字サウチ3625番地畠(644m²)および、坂田栄三所有地喜瀬字サウチ3624番地畠を第2地点とし、ここにAトレント、Bトレント、Gトレントを設定し、Aトレントを出口階、Bトレントを本田道輝、Gトレントを河口貞徳が担当し、調査のすべてを河口が統括した(第2図)。

第3図 サウチ遺跡第一地点図



調査団の構成

調査団長	笠利町教育委員会教育長	西 忠茂
調査主任	鹿児島県文化財審議委員	河口貞徳
調査員	鹿児島県文化課研究員	出口 浩
	加世田女子高等学校教諭	本田道輝
調査補助員	熊本大学研究生	中山清美
	測量技師	牧野哲郎
	奄美考古学会会員	里山勇広
調査事務長	笠利町教育委員会社会教育課長	三井勝吉
総務	中場徳義・川畑勝義・源訪東	
委員	富永幸男・南隆光・別府良美・太平武徳・藤井悦郎	
作業員	龍谷大学学生	山田順一
	大島北高等学校学生	林 昌一 登山忠仁・赤崎隆・東正樹・恵俊和・荒垣重仁・藤井綱・肥後芳郎・大茂昭明・与正弘・奥輝久・藤永浩・佐々木和弘・泉二信介・勢田勝市郎・恵達也・前田みのり・東紀子・平江もとみ・竹その子・重江加代子・重井良子・田中珠代・青山祐子・久保政孝

このほか次の諸機関や諸氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

大島郡笠利町	
大島北高等学校	
笠利町職員	勝 英龍 長井利一
大島北高等学校教諭	稻田博美

(河 口)

第2章 発掘調査

1. 遺跡総説

サウチ遺跡は、旧サウチ集落前面の砂丘内縁に立地している。背後の山地と前面の砂丘に保護され、湧水を有し、背面の平地は小川によって一部低湿地を形成している。遺跡からはイノシシの骨が発見されており、背後の山地は獵場となつたであろうが、食物残渣の大部分は海産物であり、前面の海が重要な生産の場であったことは言うまでもない。民宿の食堂には、遠く京阪神あたりから来た漁客の魚拓が壁面一ぱいに張りめぐらされており、現に同宿の客が、夕刻には獲物のピクを手に帰来するのが日課のようになっていた。勿論われわれの夕餉の菜も民宿の主人がその日に獲った海の幸であった。

現在こそ自動車をどうやら通ずるようになっているが、元はサウチは孤立した集落で、唯一の交通路は、汀線に沿つたふみ分け路であった。その不便さが集落を消滅させた原因でもあったろう。先史時代の環境は現在以上にきびしかつたと思われるし、孤立的要因も現在以上と思われるが、遺跡の内容を考えると、外来伝播を考えざるを得ない。それは海上交通による以外の方法は考えにくいく。

遺跡の南側は埋葬地であったと思われるが、民宿建設によって消滅した。現在残されているのは埋葬地の一部と、その北へ継ぐ生活地域と考えられる部分で、民宿の北に隣接する「グスクバチ」と呼ばれる地域は樹木が密生し、内部には立ち入るべくもないが、東側の道路に接する部分には、板石状に割られたビーチロックが、幾段も重なつたヶ所がいくか所を見られ、或は遺構かと思われる。南端と北端の調査状況から見ると、この部分が遺跡の中心をなすようである。

今回の発掘は遺跡の北側 $\frac{1}{3}$ 群について行なつたもので、遺跡の範囲を知るために南端部も一部調査した。本遺跡の文化層は3層あり、最下部の文化層は現在の道路面より約1mの深さにあり、砂採掘地の入口から、道路下へ延びているが、範囲は割に狭い。面縦西洞式の層である。

中位の文化層は最も広く分布し、遺跡の全面を覆っているようである。層の最高点は西側の砂丘後縁に近い部分にあり、標高6m位で、東側と南側へ傾斜し、最低4m位まで下っている。この層は砂採掘地では全く削り取られて、二分され北地区と南地区的層を連結することができないが、包含遺物によって、北地区的第5層と、南地区的第9層とが同一文化層であることが判明した。

最下文化層は東南地区と南地区で接触し、無遺物の間層を隔てて上下に重なつていていることが判明した(第14図・図版第13下)。東南地区では削られた面から數えて最下文化層を第3層としたが、南地区的層位で呼べば第11層となるのである。

中位文化層は弥生前期及び中期の文化層で、中に奄美独自の文化に属すと思われる遺物を含んでいる。

上位の文化層は分布範囲は、中位文化層には及ばないが、南北に細長く延びて、遺跡の末端に達している。北地区及び南地区では、無遺物の間層を隔てて、中位文化層の上に重なつていている。兼久式によって代表される層である。

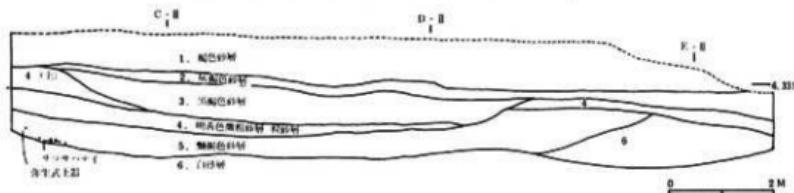
砂丘遺跡では上下の層に包含された遺物が混合する例がしばしば見られ、編年資料として使用しにくいことがある。本遺跡でも、まったく無遺物層と思われた純砂層から、突然遺物の出土する例が2~3あった。しかしこのような例はまれで、各文化層の遺物の混合は殆ど見られなかった。本遺跡の特徴の一つであろう。発掘面積 第1地点北地区 229.72 m²、同東南地区試掘地点 1.75 m²、同東南地区 6.4 m²、同北地区 21.86 m²、第2地点Aトレンチ 40 m²、同Bトレンチ 24 m²、同Gトレンチ 10.47 m²。総計 391.8 m²である。(河口)

2. 各地区の調査

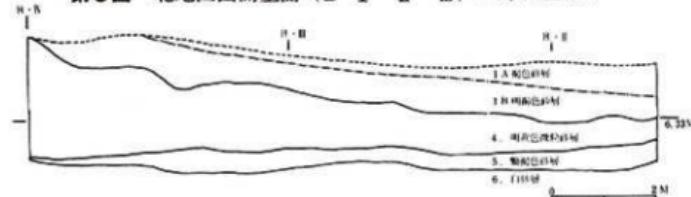
a. 第1地点 北地区の調査

本地区は、調査地域内の北側約300 m²の台形状の区画をさし、採土による掘削をまぬがれた場所である。グリッドではA~E、I~IIIとIVの一部にあたる。実際の発掘部分は砂土の崩壊を考慮し、隣接地よりひかえて次の区域とした。B-II地点から東へ2m地点とB-IV地点を結ぶ線を西の堀、第II線を北の堀とし、東は道路、南は砂の採掘によって生じた崖面を堀とする範囲である。8月17日5層の遺物の出土状況により、B-II区、B-III区をB線まで西へ拡張し、更にB-II区、C-II区を北へ2m拡張、D-II区は北西隅1.2m幅を同様に2m拡張した。発掘面積は280 m²である。

第4図 北地区・北側壁面図 (B・C・D・E-II線)



第5図 北地区西側壁面 (B-I・II・III) ●印は土器片



層位（第4・5図）

本地区は樹木の密生地であり、調査直前にブルドーザーによって除去作業を行っていた。その際、樹根など除去作業がなされ30~50cmの深さで表土が剥がれたものと思われる。ここに記す層位はそれ以後のものである。

第1層 褐色砂層で50~100cmの厚さでみられD-I区~E-II区にかけてが深い。東方道路面でカットされている。種々の樹根や陶器・ガラス・鏡等を含み攪乱層である。扁平な石や円錐・角錐等も多い。また貝殻も出土した。直前に剥がれた表土を加えると1mあまりの深さとみられる。西壁面では、南から北へ低く傾斜をなし、下部は明褐色を呈している。

第2層 灰褐色細砂層で20cm内外の薄い層をなしている。B-I区から東方へゆるやかな傾斜で伸び道路側では30cmの厚さを測る。西端では消滅し、西壁面には見られない。無遺物層である。

第3層 黒褐色砂層で、サンゴ礁をはじめ貝の小破片・小礫を含む。土質は砂であるが、わりに固く、灰褐色、灰黒色と混った部分が多い。遺物包含層である。北壁面（II線断面）ではB-II区東半からD-II区西半の部分に限ってみられ、C-II区で厚さ60cmと最も深く鍋底状の層をなしているが、東及び西側の隣接面では明黄色ないし白砂の純砂層となり8層は消滅している。

第4層 明黄色微粒砂層。軟らかく手触りの良いサラサラした美しい砂である。西壁面で視察されるごとく南側で厚く、B-II区で2mを測る。北方へ急に薄くなる。無遺物層と思われるが、時に土器片が単発的に、またシャコガイ・サラサバティなどが出土する。

第5層 黑褐色砂層・黒褐色ないし灰褐色を呈する部分もある。サンゴ層や貝小片・貝粉・小礫を含む。弥生前~中期の時期に相当する遺物包含層である。東方はD-I・D-II区あたりまで残り、それ以東は消滅している。

第6層 白砂層・第4層と同質である。

以下の層については、C-II区附近をブルドーザーで地表下4m掘り下げ確認を行なった結果、粒子の荒い細砂層とサンゴ礁層が交互に表われ、包含層は見られなかった。

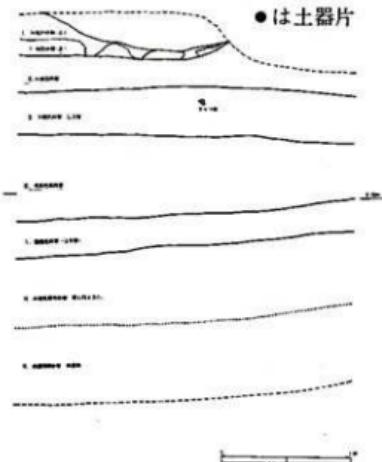
C-II区における土層断面について

（第6図）

第1地点南側は採土のための掘削が行なわれており、C-II区に良好な土層断面が露出していた。以下説明を加えてみたい。

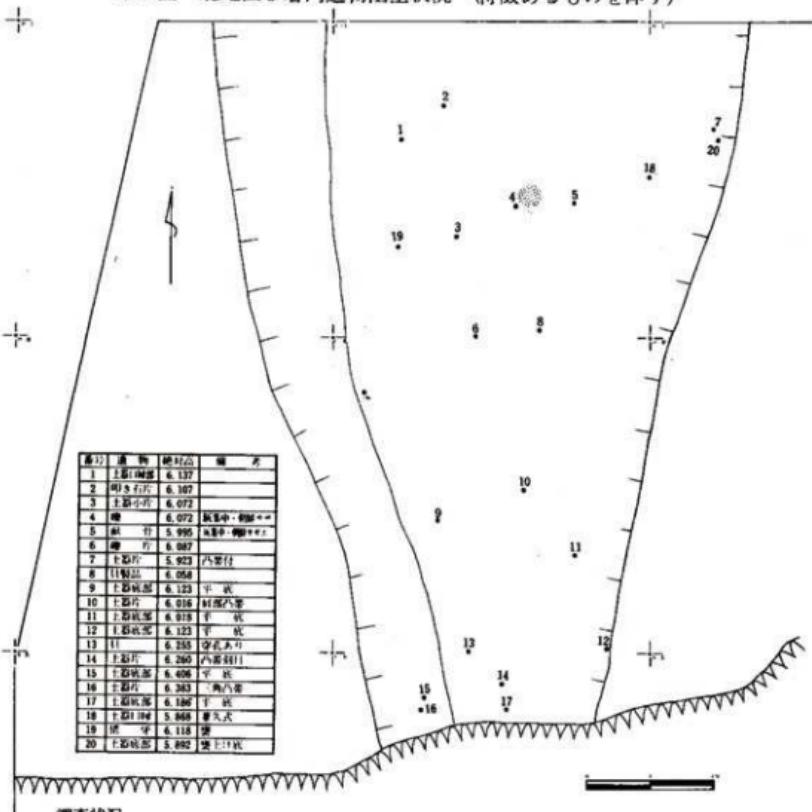
層位は北地区とほぼ同様のものがみられた。8層・5層が遺物包含層とみられ、6層が色調がやや異って上部灰褐色細粒砂層（絆石粒を含む）下部淡褐色細砂層を示している。6層は無遺物で1m以上の堆積がみられる。7層以下は不明である。南側の採土は3・5層

第6図 C-II区北側壁面図



の包含層を完全にカットしていた。3層上半部には三角凸帯の付いた脚部片、充実した底部（木葉压痕文あり）破片、シャコ貝等出土しており（＊印）北地区第3層と同一文化層であることが判明した。

第7図 北地区3層内遺物出土状況（特徴あるものを印す）



調査状況

樹木の伐切、抜根のため電機が入り地表面はすでに削られていた。現地表面は凹凸がはげしく、掘り下げながら全面をならしていく。地形は西から東へ低くなり、道路面で切られている。第1層の上半分ぐらいまでは樹根が張り、樹木が埋没したものもあり、その除去には困難をきわめた。特にアダンの根は柔軟性があって強靱で難行し、D-II区、E-II区に特に多く、また道路側は擾乱が激しく30～50cm掘ってもコーラやヤクルトの罐が埋没していたが、下半分は比較的雜物が少なかった。

現代陶器にまじって脚台付きの底部（成川式土器に類似）や兼久式の口縁部片などの少量の出土

をみた。C-I区にはやっとかかえきれるほどの扁平な石塊が2個散乱していた。その他、貝殻や礫などもみられた。

第8層は文化層である。断面はⅡ線における観察をすでに述べたが、平面は次の通りである。
(第7図参照) 包含層はB-I区東半からD-I区の西半に分布し、南はC-N区に至り狭少となり、さらに南は採土時にカットされている。C-N区では薄く、北方では厚くなり、レンズ状に堆積している。小礫・小蝶片・小貝殻・小貝片・サラサバティなどの巻貝、サンゴ屑などを包含しており、灰の集中している場所もみられた。土器片も全面に散布がみられたが、いずれも少片でまとまりはなかった。しかし頸部に凸帯を縦位・横位につけるものと、曲沈線文を刻するもの、木葉压痕のある充実した底部など兼久式土器と思われるものと、脚台付でやや上げ底の成川式に類似した土器片の伴出は注目された。生活面とは思われるが、特に遺構の発見などみられなかつた。

B区西半D区東半E区は8層ではなく4層明黄色微粒砂層。白砂層である。シャコ貝・サラサバティのはか貝片や土器片を若干出土した。なおC-I区8層下位より貝垂飾品(第46図8)を出土した。土器片の包含は8層中位を主とし下位にはみられなかつた。

第4層は無遺物層である。全面80~50cmほどブルドーザーによって除去した。C-II区附近で8層下から46cmの深さで黒褐色の包含層が表われたため、この面で全面広げて調査を行なつた。

この5層が文化層である。層はC-I区・C-II区・C-N区を中心広がりDE区には伸びていない。西方はやや土色が褐色を呈するが、トレンチ壁面まで続いている。厚さは80~50cmを示し、C-I・C-II区附近が最も厚くレンズ状を示している。第3層と同じような堆積状況であるが、東西にやや広がって層をなしているといえよう。最も遺物の密集しているC-I・C-II区附近、特にC-II坑を中心としたあたりは灰黒色の色調を呈し、サンゴ屑や貝殻片を含んで固く堆積していた。土器片も主に黒色土内に包含され、全面にわたって散布していたが、小破片が大部分であった。B-II区北西隅5層下部には弥生前期後葉とみられるやや大形のまとまった土器片が出土した。(第11図) そのほか円錐(砂岩が多い)、破碎蝶片、石斧、猪の骨、牙製品、魚骨、貝殻等C-II区附近を中心として多く出土がみられた。土器片は弥生前期から中期の特徴をもつものが大半を示しており、特に變形土器が多い。

遺構も検出されたが、遺構の項で詳述するので簡単に触れたい。

B-II区の南東隅からC-II区にかけて、広さ1m四方厚さ10cmの灰層が見られ、猪骨・猪歯が点々と観察され、また土器片も出土した。これに接して北西に位置する略4角形の砂岩は立石となっており、表面は赤く焼けた部分があり当時5cmほど地表面に露出していたと思われ、灰層と深い関連があるものと見られた。

B-II区には6層内に切り込まれた略方形の落ち込みが見られた。わりに浅く灰褐色の砂が埋土となっており、その中に紡車重、床面に土器片・貝殻・サンゴ礁など包含していた。落ち込み西方には土器底部の破片や植石等がみられた。

B-II区からB-I区にかけて梢円形の落ち込みがみられ、ヤコウガイ・サラサバティ・サンゴの平たい蝶、その上にスイジガイが重なって出土し、また底面よりはオオツタノへの貝輪を出土した。北側には不定形の落ち込みが接していた。

前述したように第5層はC-I・C-II区が厚くその東西は6層に達する。同層の5層該当面ではやはり遺物の出土が少量みられた。B-II区では6層が薄く、下位のサンゴ礫層となる。B-II区南側5層内からは大型厚手の壺形土器の破片が出土したが、この層においてはほとんど変形土器の破片のみであったので注目された。**第8図 C-I-5 上 板状ビーチロック出土状況**

B・C・D-I区およびB-II。

B-II区拡張区について

第5層において多くの遺物・遺構の発見をみ、北西隅にはほぼ完形の変形土器の出土をみたので、北側へ20m、西側へ10m拡張してさらに追究することとなった。その結果第8層は、ややせばまり、うすい4層をはさんで第5層もうすぐくせばまって北へ伸びることが明らかとなった。遺物の出土状況は少量となる。

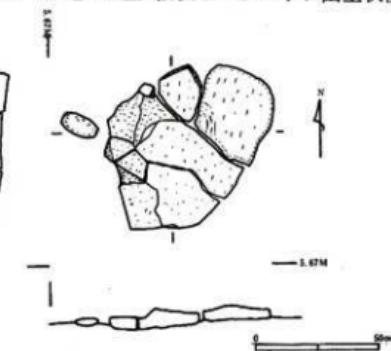
C-I区に板状のビーチロックが5層最上面に出土した(第8図)。あたかも石塀の土塀の様であり慎重な調査を行なったが、その下には特に変化はみられず、バイオウニの殻がまとまって出土したのみであった。弥生前期土器片の出土もみられたが、これは他と同様の包含層としての出土量で、かわった点ではない。したがって意図あるものではないと考えたが、このような板状のビーチロックがなぜここにあるのか、疑問が残る点もあり念のために記した。

B-I区5層下部該当の白砂層中に珪岩質の円礫11コの集積と、近くに多量のサラサバティそれにホラガイ1、スイジガイ1をまじえ、貝殻多数検出された。北西側には体部を削られたタカラガイのまとまりもみられた。弥生前期土器片も現在している。珪岩質の円礫は小児の拳大の大きさに統一され、またこの地点しか出土しない。意識的に集めたものであろうが興味深いものである。

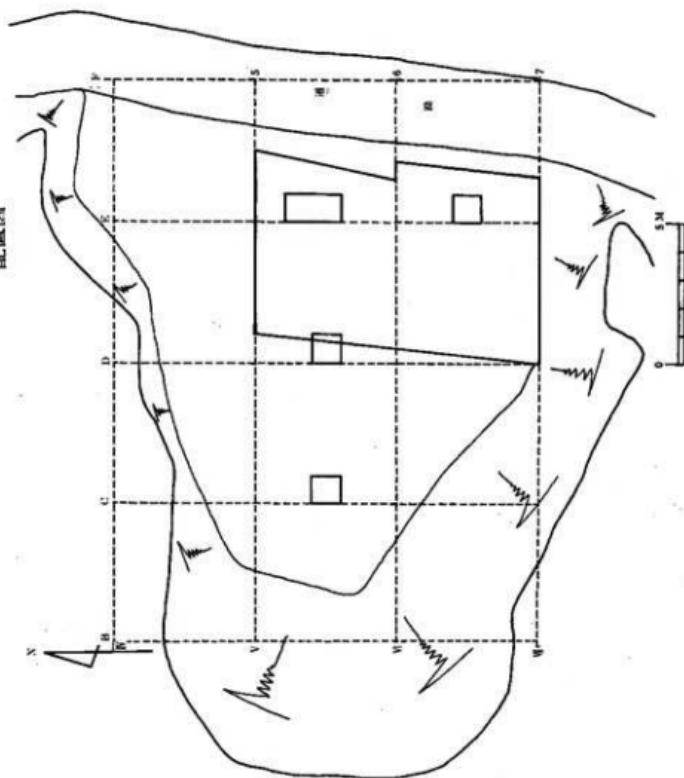
(出 口)

b. 第1地点 東南地区の調査

当地区は、本遺跡発見のきっかけとなった地域である。すでに、過去における砂採掘により、民宿竜巣より海岸へ通づる道路から、西側(海岸側)へ最大幅約20m、奥行約22mにわたって道路面まで掘り凹められ、ために隣接地域とは8.5~2mの比高差をなす馬蹄形の凹地となっている。隣接地域が、西側から東側へと傾斜して道路面へ至る砂丘地形をなしているので、かつてはこの東南地区も、馬蹄形凹地頂部付近に最高点をもつ同様の地形であったであろう。(第17図参照)



第17図 東南地区 試掘トレンチ本調査地域
配置図



遺跡発見のきっかけとなった遺物は、周辺よりこの凹地へむけて崩壊した砂中より採集されており、又かつて砂採掘の際、白砂層の中を帯状に走る黒色砂層が何層か存在し、土器や貝殻・骨類等が見られたという地主原永貞盛の談から判断して、当地区においては、すでに何層かの文化層が消失し、採集遺物（貝殻・磨製石器等）を包括したであろう文化層も消失している可能性が強いと判断した。そのため、当地区においてはまず4カ所に試掘トレンチを設定し、地層の状況と残存する文化層の確認作業から調査を開始した。主に当地区発掘調査を担当したのは中山・本田である。

試掘調査

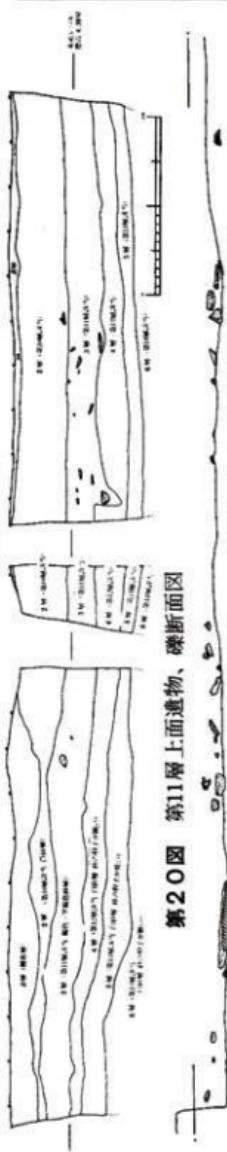
試掘トレンチは、C-V区、D-V区、E-V区、E-VI区にそれぞれ $1m \times 1m$ で設定し調査をおこなった。（第17図参照）表層は、いずれのトレンチにおいても擾乱されており、場所によっては固くしまっている。C-V区においては現代陶器片が見られた。第2層は白砂層である。いずれのトレンチにも検出されたが、遺物の出土は見られない。第8層は褐色砂層である。E-V区、E-VI区に検出され、D-V区においては極めて薄く存在するが、C-V区には認められず、すぐにサンゴ層となる。D-V区も同様に薄い第8層からサンゴくず層となる。E-V区では、第8層最上部に幅6.0cm程のビーチロックが出土し、E-VI区では同様第8層最上部に礫が3点見られた。E-V区出土のビーチロックは、試掘トレンチ北側へのびその全容がつかめなかつたためトレンチを北側へ $1m \times 1m$ 拡張したところ、長径8.0cm程の大きなものであることが確認できた。さらに、拡張区においてこのビーチロック周辺より少量ではあるが土器片が出土し、第3層が文化層である可能性が強くなったため、グリッド掘りに切替え第8層の本調査をおこなった。（後に、南地区において探査前の層序を確認することができ、この第8層は本来地表面より第11層目に当ることが判明した。以後第11層とよぶ。）

本調査

グリッドは、試掘結果より判断して、その南北をV-VII杭列に合わせ、西側はE-V杭より西2m E-VII杭より西8mの地点を結ぶ線、東側はE-V杭より東2.5m E-VI杭より東1.5m E-VII杭より東1mの地点を結ぶ線で囲まれる地域に設定した。さらに、遺物の出土状況にあわせて、西側はE-V杭より西4mの地点とD-VII杭を結ぶ線まで拡張し、東側はE-V区はそのままに、E-VI区はE-VII杭より東2.1m E-VII杭より東1.5mの地点を結ぶ線まで拡張した。第11層は西から東側（道路側）へと厚味を増し、それに呼応して遺物や礫はグリッド東側に集中する傾向にあり、道路下へ遺跡がのびていることは確実であるが、これ以上東側を拡張すれば、土質が砂地でもあり、車の往来により道路が崩壊する危険があったため、前述部分以上の拡張を断念した。結局、最終的な当地区本調査地域は、南北はそれぞれVII杭列V杭列に合わせ、西はE-V杭より西4mの地点とD-VII杭を結ぶ線、東はE-V杭より東2.5m E-VII杭より東1.5mを結ぶ線と、E-VI杭より東2.1m E-VII杭より東1.5mを結ぶ線で囲まれた地域で、やや変形なグリッドとなつた。本調査グリッド面積は、64m²である。（第17図参照）

地層（第18図参照）

第18図 第1地点東南地区グリッド東壁層位断面図



第20図 第11層上面遺物、礫断面図



第22図 第11層中～下部遺物断面図

第11層調査完了後、グリッド東壁に沿って幅1mで深掘りをおこない土層の確認をおこなった。地層は、凹地表層より6層を確認したが、砂地のため壁の崩壊甚しく、それ以上の深掘りは困難であったため、7層目以下は未調査である。表層は擾乱層である。場所によって5~40cmとその堆積に違いが見られ、D-V区、E-V区が一般的に厚い。砂採掘の際の擾乱と考えられる。土器・貝類が少量検出された。2層目は本来の第10層に該当し、白砂層である。上面は極めて不整合で、その厚さも場所によって相当な違いが認められるが、本来のものではなく、砂採掘の際に削られたのが原因であろう。D-V区、E-V区で厚く、約60cmを測ることができる。貝類が少量出土するが、2層最下部においては、土器片や礫も検出された。これらの遺物は、遺跡が砂丘地であることを考え合せれば、3層目(第11層)遺物の浮き上りの可能性が強い。土器は面繩西洞式(註1)であった。8層目は、先に述べたごとく本来第11層で、確実な遺物包含層である。褐色ないし黒褐色の色調をなし、E-V区南側からE-V区にかけて特に黒味が強い。グリッド北側や西側は、その色調が薄くなる傾向があり、乾燥すれば第10層との判別がつきにくい。遺物は、第11層上面から中間にかけての出土が多く、第11層の色調の変化とも関連性があり、E-V枕周辺からE-V区にかけて、即ち黒味の強い地域に集中してみられる。土器は面繩西洞式であり、この第11層は面繩西洞式時期の文化層と考えられる。4層目(第12層)は第10層と似通っており、粒子の細かい白砂層で無遺物層である。20~30cmの厚さをなす。5層目(第18層)は色調等に第12層と変化ないが、第12層と比較して砂の粒子が荒い。貝類が数点認められたが、文化層とは考えられない。15~30cmの厚さをなす。6層目(第14層)も上層同様白砂層で、色調等に変化はないが、再び砂粒子が細かくなり枝サンゴが点々とみられる。文化層とは考えられない。7層目(第15層)を求めて、凹地表層より2m近くまで掘り下げたが、層の変化は認められず、壁面の崩壊も甚しいため、それ以上の掘り下げを中止した。試掘トレンチC-V区、D+5区で凹地表層より70cm~1mの深さで確認したサンゴくず層は、グリッド東壁では検出されず、東壁層序との関係は明確でない。

以上述べてきたとおり、当地区においては、表層及び2層目(第10層)上部が砂採掘の影響を受けているものの、2層目(第10層)下部より以下の層序は、旧来の姿を保っていた。各層間に大きな起伏は認められないが、グリッド東壁地層断面図(第18図)に見られるように、各層ともE-V区よりE-V区へかけて傾斜をなし、再びE-V区からE-V区へかけてゆるやかに上昇する傾向にある。遺物包含層は第11層の1層のみで、上部に存在したであろう何層かの文化層は、すでに消失し存在しなかった。

第11層の調査(第21~22図参照)

第1地点東南地区において残存した遺物包含層は第11層である。グリッド設定のきっかけとなつた試掘トレンチE-V区のビーチロックは、第11層上面において出現したため、まずグリッド全域第11層上面の調査をおこなった。第11層上面においては、遺物等の出土状況に片寄りが認められる。D-V区南側、D-V区は非常に遺物の出土が疎であり、D-V区北側、E-V区、E-V区北側には10~30cm程の礫やビーチロックが散在し、ショコ貝、イモ貝系の巻貝等が点々と見られる。人工遺物は少なく、石器(すり石)数点と土器片が少量出土したにとどまった。土器片は小破片のみでまとまりがなく、ただE-V区において出土した平底底部が目につく程度である。E-V区の

大きなビーチロックは、約80cm×60cmを測り、付近に点々とシャコ貝が見られ、あるいはこのビーチロック下に埋葬址が存在するのではないかと調査員一同期待したのであるが、結局ビーチロック下には掘り込み等は検出できなかった。第11層上面における礫やビーチロックの出土状況は、遺跡地が砂丘であることとも考慮すれば、自然的なものとは考えられず、何らかの目的で遺跡地に持ち込まれたものであることは疑いない。しかしながら、この礫及びビーチロックはあまりに散在しており、その性格を考察することは難しい。(第19・20図)

第11層上面の図面終了後、掘り下げをおこなったが、第11層中～下部においてはさらに礫やビーチロックが多数出土した。第11層上面同様出土状況には片寄りがみられ、D-V杭よりE-VI杭へかけて、及びE-VI区にその大半が集中している。礫は第11層上面同様10～80cm程の自然礫で火を受けた形跡はない。ビーチロックは、小さなものは各区に点在するが、大きなものはE-VI区に集中する傾向にあり、特にE-VI区東壁付近には重なりあって出土している。第11層中～下部は、その色調が場所によって黒味を増し、E-VI杭北側(一括土器出土地域周辺)やE-VI区東壁北側及びD-VI区東南部がその傾向にある。特にE-VI区東壁北側(ビーチロックが重なりあって出土した地域)は黒味が強い。この黒味の強い地域では、E-VI杭北側を除いて灰のかたまりが見られ、木炭が混在している。(第21・22図)

遺物は第11層上面と比して増加するが、量的にはさほど多いとは言えない。自然遺物としては、シャコ貝がほとんど見られなくなり、貝類はにしきうず科。たからがい科。いもがい科等の巻貝類が大部分を占める。(註2)魚骨・獸骨の出土も多くなり、ブダイのあご骨が目立っている。これらは全区に見られるが、D-VI区東南部灰層付近は特に多い。D-VI区においては鹿角ではないかと思われるものが1本出土している。詳細は同定をまつことにしたい。人工遺物としては、礫及びビーチロック群に混じて、土器・石器・貝匙が出土している。土器は口縁部や頸部に刻目凸帯をめぐらし、沈線を施すもので、面繩西洞式土器である。無文の口縁部も見られる。全般に焼成が良くなくもろいものが多い。E-VI杭北側において、かなりまとまるものが出土したが、その他はいずれも小片で各区に散在する。このE-VI杭北側出土土器は深鉢形で底部はないが、他に見られる底部はいずれも平底であるので、底部形態は平底と考えてまちがいなからう。石器は、第11層上部同様すり石で、他の石器は発見できなかった。E-VI区東壁付近にては、巻貝を利用した貝匙が2個出土している。第11層中～下部の遺物出土状況は、その量的増加こそあれ、まとまりのない点では第11層上面と同様であり、礫及びビーチロックの散在する状況の性格を把握するのは難しい。ビット状のものがE-VI区東壁に1カ所検出されたが、他には見られなかった。

以上の結果から判断して、本地区第11層は面繩西洞式時期の生活址と考えられるが、遺跡は道路下にのびており、その全容は明らかにできなかった。礫・ビーチロック群の性格については、今後更に検討を加えてみたい。

まとめ

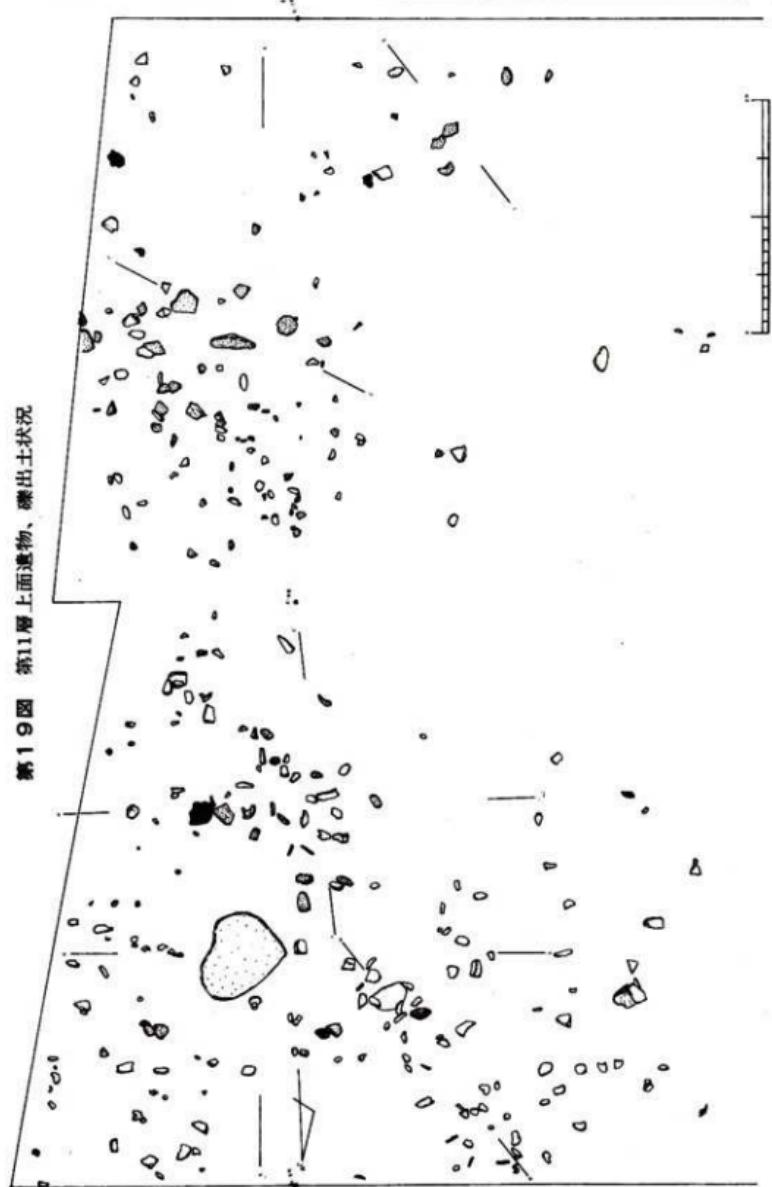
すでに述べてきたように、第1地点東南地区は砂採掘により上部文化層が消失し、遺物包含層は1層を確認したにとどまった。しかしながら、それは面繩西洞式時期に該当し、遺跡の形成時期は繩文後期あるいはそのやや後(註3)と考えられる時期まで遡ることが判明したのである。この層

は道路下にのびているため、その全容はつかめなかつたが、当時の生活址と考えてまちがいあるまい。生活址だとすれば当然考えられるのは住居の件である。今回の調査では、ピット状のものは1カ所存在しただけであったが、遺跡地は砂地であり遺構が残りにくいのか、あるいは調査外地域に住居跡が埋没しているのか、又あるいは最初から本格的な柱穴等を必要としない形態の住居であったのか、考えさせられる点である。現時点では何とも判断がつかないが、仮に最初から本格的な柱穴を必要としない住居を考えれば、簡単な柱を組んだテント状の住居が考えられる。グリッド内に散在する躑躅の一部はその重しであろうか。今後の南西諸島における調査に注目したい。ちなみに、南西諸島における住居跡報告例は極めて少なく、洞穴等を除けば筆者は4例を知るのみである。そのうち2例は、宇宙上層式時期該当と考えられるので時代幅が大きいが、奄美大島宇宙貝塚と沖永良部島住吉貝塚において、略方形に囲んだ石組み遺構が検出されている(註8)。柱穴等は存在しない。もう2例は種子島納曾遺跡にて発見されたもので、平地式住居と竪穴住居かと考えられている(註4)。柱穴が存在する。時期は縄文後期後半である。次に石器であるが、すり石のみしか出土しなかつた。他遺跡の調査例からして、石斧は当然所有していたと考えられるが、それにしてもその種類の少なさは注目される。第11層より出土した自然遺物は貝類・魚骨がその大半を占め、当時の人々の生活が海に重点を置くものであったことは、遺跡の環境から考えても当然のことであるが、出土した骨類の中には獸骨も混じている。奄美諸島において、これまでの調査では石器は全く発見されていないが、これら陸上動物を捕獲する方法はいかなるものであったろうか。やはり刺器・ワナの類を考えるのが妥当であろうか(註5)。今後究明しなければならぬ問題は多い。

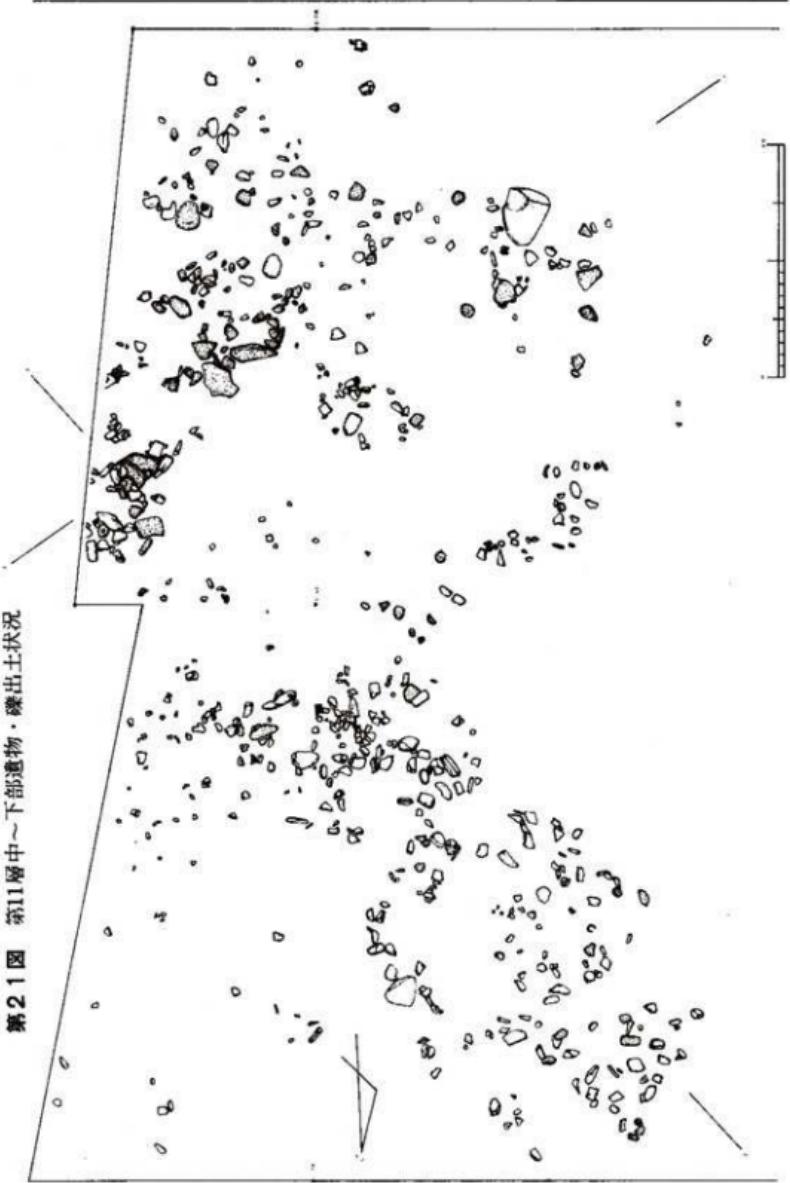
(本田)

註

1. 「奄美における土器文化の編年について」河口貞徳『鹿児島考古第9号』鹿児島県考古学会(1974年)
この中で、河口氏は從来宇宙下層式と総称されていた土器を細分し、編年考察をされた。而して西洞式はその中の一形式である。
2. 『原色貝類図鑑』吉良哲明 保育社 を参考にした。
3. 「奄美大島の先史時代」国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三『奄美一自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会編 (1959年)
4. 『西之表市納曾遺跡』上村俊雄 西之表市立博物館刊 (1977年)
5. 『南島先史時代の研究』国分直一 慶友社 (1972年)
国分氏は(7.原始経済技術 8.弓射の技術)の中でこの問題に触れ、刺器・ワナ類を推定しておられる。



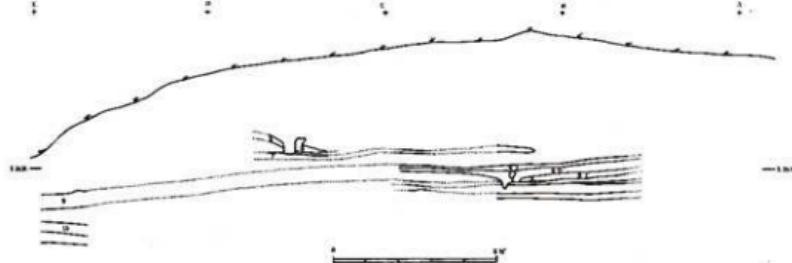
第21圖 第11層中~下部遺物·礫出土狀況



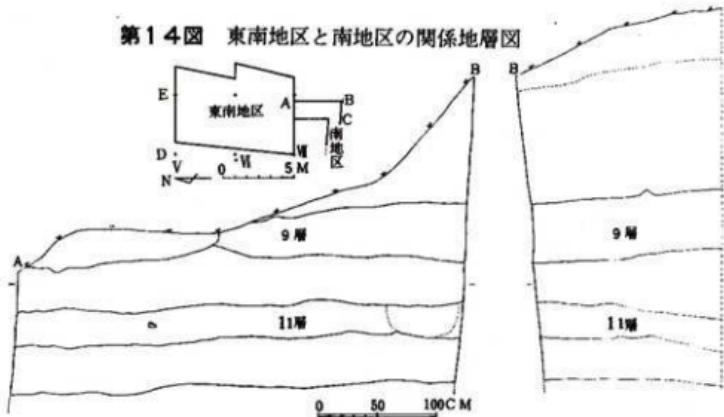
C. 第1地点 南地区の調査

南地区は地主の砂採掘によって生じた、第1地点南端の崖面である。傾斜角は 45° 、崖の上縁は開拓地との境界線と略一致している。崖の上縁は、第1地点西南隅境界点より10m地点が最高点で標高9.28mであり、それより西へは僅かに傾斜して、崖面西端で8.6m、東へは傾斜はやや急となり、崖面東端の道路に接する地点では5.58mとなっている(第8図・第18図・第2図)。

第13図 第1地点 南地区地層図



第14図 東南地区と南地区の関係地層図



南地区崖面は貝札・磨製石器などの重要遺物が採取された包含層が、露呈していたところで、地表以下の層序を観察できる唯一の地区でもあった。そこで崖面の裾部を削って、地層を観察し、包含層の平面的な把握もできる範囲で行なうこととした。調査の結果種々の知見と資料を得ることができ、崖面裾部の断面も全域に渡って削り出し、基本的な層序の観察を行うことができた。しかし乍ら、写真撮影・図面実測の段階、またはそれ以前に、しばしば崖面の崩壊が起り、記録は局部的にならざるを得なかった。崖面の再掘削は、再崩壊を起すことが明らかで、境界の保全と危険防止

のため実施しなかった。

調査は先づC-M区・C-VI区及びB-M区東端部の崖面を削り、前面に第7層（遺物包含層）が、砂探掘から免れて一部残存していたので、これを平面的に抜げ、幅1m、長さ5mのトレンチとしたが、第7層の範囲はこれ以上にひろがらず、下層の第9層（遺物包含層）の調査に移った。調査は崖面に沿って、1m内外の幅で西へ延長し、7m余りにおよび、第9層面の消滅によって西の限界とした。第9層面の残存範囲は崖面に沿って幅1m内外で、長さ12m、C-VI区・C-M区・B-M区・A-M区・A-V区に属する区域である。

上記のトレンチは、東方向にも、崖に沿って、「く」字状に延長し、幅約1m、長さ7mにおよび、崖面の東端道路との接点に達した。

この断層部は、C-VI区の東端部からD-VI区に属する範囲で、D線を中心にして、約1m四方の第7層包含層面を検出した。

南地区的調査は8月7日に開始し、同18日に一応終了したが、後に東南地区との層位関係を明らかにするため、E線に沿って、その西側をブルドーザーで掘削し、両地区を連結した。南地区的調査面積は、連絡部を除いて21.86m²である（第8図）。

地表面からの層序

南地区は砂探掘によって、全体に断面が露呈しているわけであるが、あるいは樹根が垂れ下がり、あるいは乾燥した白砂が表面を被覆して、必ずしも層序が明瞭に観察されるわけではなかった。このなかでC-M区・C-VI区の崖面はめずらしく地層が判然としていたので、この地点の層序を次に記す。数字は目測である。

C-M区・C-VI区崖面の地層

第1層	表層	黒褐色砂層	5.0cm
第2層		明黄色砂層	8.0cm
第3層		淡黒褐色砂層	2.0cm
第4層		明黄色砂層	2.80cm
第5層		黒色砂層	2.0cm
第6層		明黄色砂層	8.0cm
第7層		黒褐色砂層	2.0cm
第8層		明黄色砂層	4.0cm
第9層		黒褐色砂層	5.0cm

以上の地層のうち実際に掘削したのは、第5層以下で、第5層・第7層・第9層が遺物包含層である。第3層も遺物包含層であるかもしれないが、たしかめる方法がなかった。

第5層より第11層までの地層

南地区は崖面に沿って約2.0mのトレンチを設け、崖面を削って第5層以下の地層を明らかにした。しかし前に記したように調査の途中において、しばしば崖面が崩壊して、全面の実測が不可能となり、局部的な地層図の作製にとどまった（第18図）。地層図中、点線の部分は崖面の崩壊によって、消滅した部分を、事前の観察によって補ったものである。したがって層の厚さは正確さを欠

くと思われるが、上下、左右の関係には誤りはない。

第5層

C-VI区の崖面に現れた局部的な地層で、厚さは、東側で20cm、西側では次第に細まって消滅している。東より西へ傾斜し、全長約2mで、中央で5層上面から幅65cmの落ち込みがあり、この落ち込みは、下層の第6層（無遺物層）を切って、第7層表面に達している。

地層の色は黒色で、部分的には黒褐色を呈している。この色は木炭の粉沫を多く含んでいるためと思われる。遺物包含層である。注意すべき点は、この地層が西端付近で第7層と2ヶ所で接触している点である（第18図）。尚第5層の東端最高点は標高6.48m、西端最低点では5.88mである。

第7層

第5層の下に、部分的に厚さ80cmの明黄色砂層（無遺物層）を隔てて第7層がのびている。この層はC-VI区東端近くからB-VI区西端近くまで、約8.5mの延長をもっており、僅かに波状の上下が見られるが、全体的には一定の高さを保ち、西端では標高6.86m、東端上縁では6.28mでその差は8cmにすぎない。

厚さは20cm余り、黒褐色を基調とし、西側の約半分は色が淡く、東側の半分は色が濃く黒味を帯び、かつ炭素と灰を多く含み、特に灰は層の下部に沈着して固くしまり、掘削するのに強く力を加えなければならなかつた。

遺物の包含状況も色調と関係があり、黒味の強い東半に多く、淡色の西半にはほとんど出土が見られなかつた。包含遺物の比較によって、北地区第8層に該当するものと思われる。

第9層

第7層の下に厚さ40cm余りの明黄色砂層（無遺物層）を隔てて、第9層がある。この層は分布が広く、崖面の東端から西端に達し延長20mを計る。西より東へ緩かに傾斜し、西端上縁は標高6.12m、東端上縁では3.64mで、地表面の傾斜より緩かである。

地層は東端では単純層を示すが、C-VI区東端付近より分岐して三層となり、上部は黒褐色、中部は褐色、下部は黒褐色を呈し、更にB線より東1.5mの木炭と灰の堆積部を堀として、以西では第9層上部は褐色、中部は黒褐色、下部は黒褐色と移行し、B線より西1.5m地点で再びこれらの層は合体して1層となり、色も褐色に移行している。厚さは各地点で50cm内外を示している。

第9層が三層に分岐した原因是、遺跡成立の経過と密接な関係があったと推定される。第9層は遺物包含層であるが、三層に分岐した部分に遺物の包含が見られ、木炭粉を多く混じて黒褐色を呈する地点ほど遺物の量も多く、また黒褐色層には灰の堆積部分が多く、生活との密接なつながりを示した。

第9層より出土遺物の様相は北地区第5層と同じであるところから、北地区の第5層と、南地区第9層は同一文化層に属するものと考えられ、本来継続していたものと推定される（第18図）。

第11層

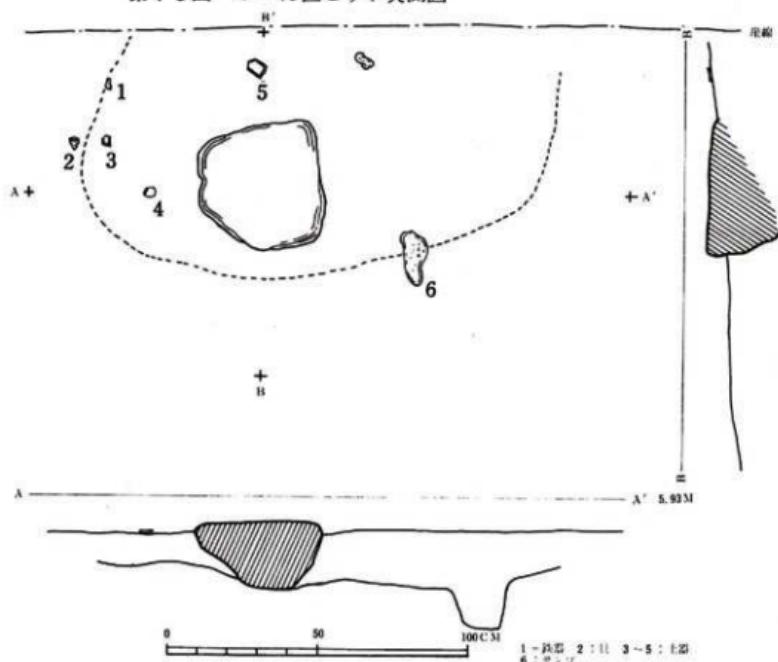
第1地点の東南地区と南地区は、D-VI区において8mを隔てて互に接していた。この地点で、南地区の第9層と東南地区の第8層との関係を把握しようと試み、東南地区D-VI区南東隅と、南

地区トレンチ南端部分（D-VI区）との間を掘削して両者を連結した。その結果南地区の第9層の下部に、厚さ4.0cmの明黄色砂層（無遺物層）を隔てて、褐色砂層第11層が検出され、この層は東南地区の第8層であることが確認された（第14図、図版第18下）。したがって第1～6点において各地点毎に別個に検出された層序は、南地区の層序との関連によって統一した層序として表現することができるようになった。

遺跡のひろがり

第7層はC-VI区、C-VII区から、B-VI区の東南隅へかけて、幅1m、長さ5mの範囲に包含層を平面的なひろがりとして、とらえることができた。この区域には遺物の散布が見られ、C-VI区では東西1.55m、南北8.8cm、深さ1.9cmの梢円形のピットが、なれば壁面にかかって検出された。位置は第5層上部からの落ち込みがみられた地点の直下に当たっている。ピットには北緯に接して、縦・横ともに4.1cm、厚さ2.2cmの自然石が、平らな表面を上にして水平に配置され、周辺に土器片、鉄器破片、焼けた珊瑚礁等が検出された。

第16図 C-VI区ピット実測図

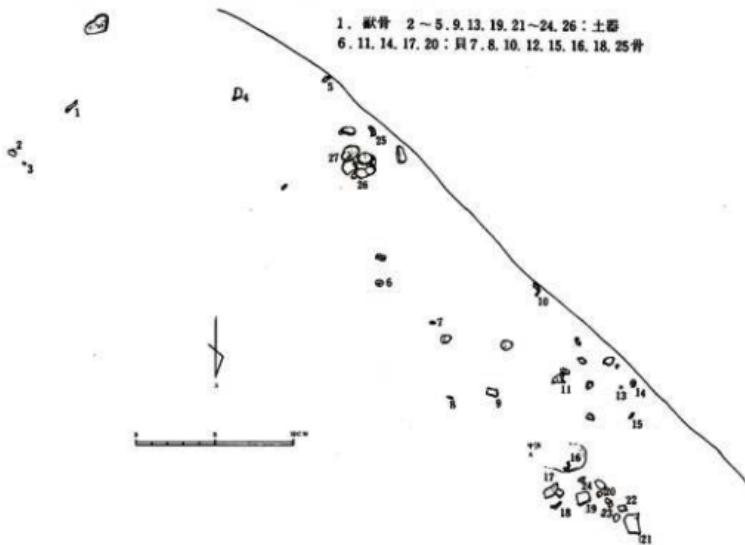


第9層はC-VI区・C-VII区・B-VI区・A-VI区・A-V区にわたって幅1m、長さ1.2mの

範囲に、南壁に沿って、包含層のひろがりが検出された。B-M区では崖面9層下部に灰層の堆積が著しく、そのうち2地点には40cmの間隔をおいて、径55cm、深さ15cmの円形ピットが、なれば壁面にかかるて検出され、内部には灰の堆積が見られた。これらのピットに隣接して弥生式土器の底部が、さかさまに伏せた形で出土した。この他ではB-M枕付近に遺物の出土が多く、土器片・貝・鰐魚骨等が検出された(第15図・第16図)。

(河 口)

第15図 第1地点南地区9層遺物出土実測図



d 第2地点 Aトレンチの調査（第2図）

崎原ビーチ民宿の北側の平坦な畑地で、牧野哲郎所有のものである。遺跡の範囲を確認するためトレンチを設定した。南北に巾2m長さ20m、北からI・II・III区～X区とした。

全面地表下3m、VII・VIII区では8.7m、IV区では4mまで掘り下げたが遺物の発見はなく作業を中止した。以下層序を記す。

1層 褐色砂層 30～40cm

2層 灰褐色砂層 30～40cm X区で1層から2層にかけては1体分の歯骨が発見されたが、鑑定の結果現代の山羊の骨であることが判明した。I区の1層下にサンゴの風化した赤褐色を呈する非常に固い層が部分的にみられ、この層中より現代の磁器片を出土した。

3層 黄褐色砂層 50～60cm (黄味を帯びている)

4層 灰褐色砂層 20～30cm

5層 褐色砂層 40～50cm

6層 灰黒色砂層 20～30cm

7層 黄白砂層 130～150cm (最も厚い層である)

8層 白砂層

2・4・6層が黒っぽい色調を呈し、包含層ではないかと推定されたが遺物の出土はなかった。当地点からは眼下に笠利湾の美しい海を望み、潮風を受けて気持ちの良い場所である。砂丘のトレンチは2mの深さを越すと乾燥するたびに次々に崩壊し、2m巾が倍の4m巾となってしまった。発掘が8mの深さに達すると、作業が困難になったので、トレンチの両端に、登り口を設け、一輪車で堆土を搬出するという方法をとった。この方法によって前記の深さに達したが、砂丘発掘の場合、トレンチ掘りではこれ位が限度で、なお深く掘る場合は、方法を変更する必要が認められた。

(出口)

e 第2地点 Bトレンチの調査

民宿サキバービーチの庭先には、かつて埋葬人骨が発見された。この地点はグスクバテと、グスクバテの西へ隣接する畑地（砂丘）が削り取られて、約2mの落差をもつ、民宿敷地の北端に当る。トレンチは人骨前出の物干し台木の地点を避けて、それより東へ、幅2m、長さ12mの規模とし、隣接する畑地の崖に沿って、略東西方向に設定した。

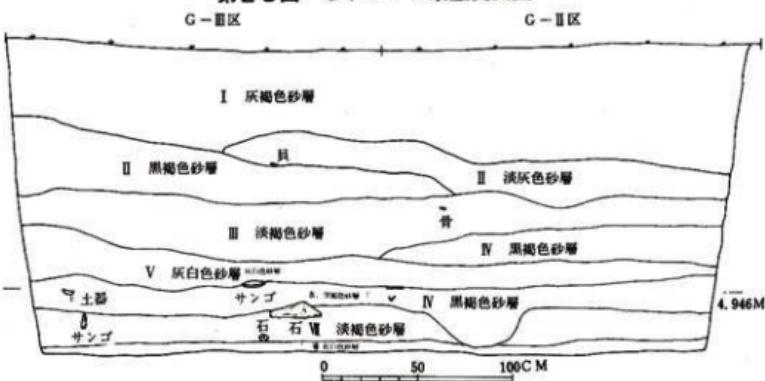
調査は2m四方を1単位として6区に分ち、東よりI区～VI区と名づけた。地層は西方より東方向への傾斜がみられ、西端で10cm、東端で40cmを測る第1層を除くと、以下は無遺物の白砂層と珊瑚礫層の互層で、1mの深さに達した。もともとこの地点は、隣接する畑地と同じ標高であった土地であるから、旧地表面よりすれば8mの深さに達したことになるのである。遺物は擾乱層である第1層から小量出土したのみで、第2層以下には発見できなかった。前述したAトレンチおよび、後述のGトレンチの調査結果と照合すると、この地点は遺物包含層の存在しなかった地域と考えられる（第2図）。

(河口)

† 第2地点 Gトレンチの調査

民宿サキバルドビーチの東北隅入口は、グスクバテの南端にあたり、基部の幅9m、先端部6m、長さ10m、比高2mの堤防状地形をなして南へ突出し、先端部にガジュマルの大樹が茂っている。

第23図 Gトレンチ東壁実測図



民宿経営者坂野栄三によれば、堤防西南端部、ガジュマルの根もと付近より、人骨頭蓋が発見されたということであった。そこで当該地点を調査することとし、堤防の西南隅より北東方向に、西側腹線を外縁として、内側へ幅1m、長さ8mのトレンチを設定した。トレンチは3区分して南よりⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区とし、Ⅰ区は長さ4m、他はそれぞれ2mとした。トレンチ名はガジュマルにちなんで「G」と名づけた。最終調査面積は、堤防が裾ひろがりになっていたために、設定当初よりやや狭く、 1.047 m^2 となった。

地層は南北ではやや差異があり、南のⅠ区では5層を数え、次の層序を示す。

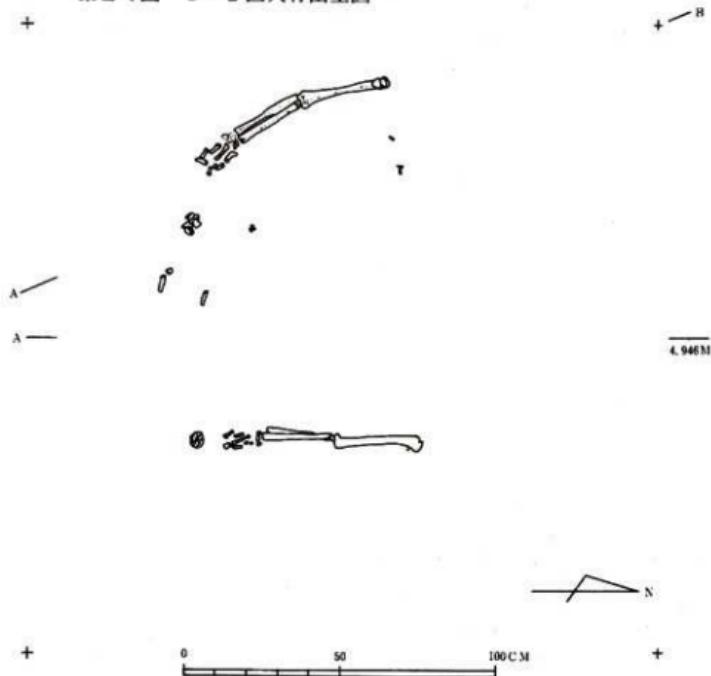
第1層 黒褐色砂層	50cm
第2層 灰白色砂層	80cm
第3層 灰褐色砂層（濃色）	85cm
灰褐色砂層	
第4層 黄褐色砂層	85cm
第5層 黄白色砂層	

北部Ⅱ～Ⅲ区では8層に区分され（第23図）。

第1層 灰褐色砂層	第2層 黑褐色砂層	第3層 淡褐色砂層	第4層 黑褐色砂層
第5層 灰白色砂層	第6層 黑褐色砂層	第7層 淡灰白色層	第8層 紅白色砂層

の層序が見られる。これらの地層は最下層を除きすべて遺物を包含している。第2地点においてA、Bトレンチの設定地域がほとんど遺物を見なかつたのに比べ、Gトレンチの設定地域は遺物の出土量が多く、現在はこの地域が遺跡の南限であることを示している。

第24図 G-2区人骨出土図



遺構としてはG-II区8層の紅白色無機物砂層中に、右上腕骨・桡骨・尺骨・手骨が僅かに内包した形で、北々西-南々東方向で出土した。この他手骨より南東20cmおよび40cmの地点に骨片数点が出土している。骨の保存状態はかなり良好で、調査時に見あたらなかった骨が腐蝕によって滅失したものとは考えられない。出土した右腕の骨の東側は、砂がやや黒ずんでおり、恐らく二次的な原因によって、未発見の骨が以前に除去されたことを示す跡であろう。或は坂野栄三によって発掘された人骨は今回発見したものと同一個体であったかもしれない。

(同口)

第3章 遺構・遺物

1. 遺構

B-Ⅲ区住居址

第1地点北地区、B-Ⅲ区5層の住居址である。平面形は北西が広く、南東へ狭くなる卵形を呈し、長径311cm、短径246cm、深さ17cmで、比較的小きなものである。

炉址はなく、床面南西隅の長径15cm、短径12cmの浅い落ち込みの他は柱穴も見られない。

床面中央はややもりあがって、この部分に平らな、縦20cm、横20cm、厚さ5cmの珊瑚礁織および、縦17cm、横9cmの同質の織が配置されているほか、周壁および、周壁に接する床面などの要所数ヶ所に、同じく珊瑚礁織が配置され構造を明確にしている。

遺構内で検出された遺物では、特に注意されるものとして土製の防重車がある。これは遺構の中央部で、埋土中より発見された。他には遺構西北隅の床面に密着出土した土器群、同じく北隅の周壁にそって出土したかなり大きな土器片、周壁に沿って貝殻4個などが発見されている。

本遺構は第6層の純砂層中に第5層が落ち込んで形成されており、埋土は木炭粉の混入のため黒色を呈し、また砂に焼けた痕跡がのこされ、生活面であったことを示している。

奄美においては、宇宿貝塚、佐吉貝塚において方2mの略方形の石囲い住居址が発見されている。両者共に柱穴が見られない。いずれも宇宿上層式の時期にあたる。

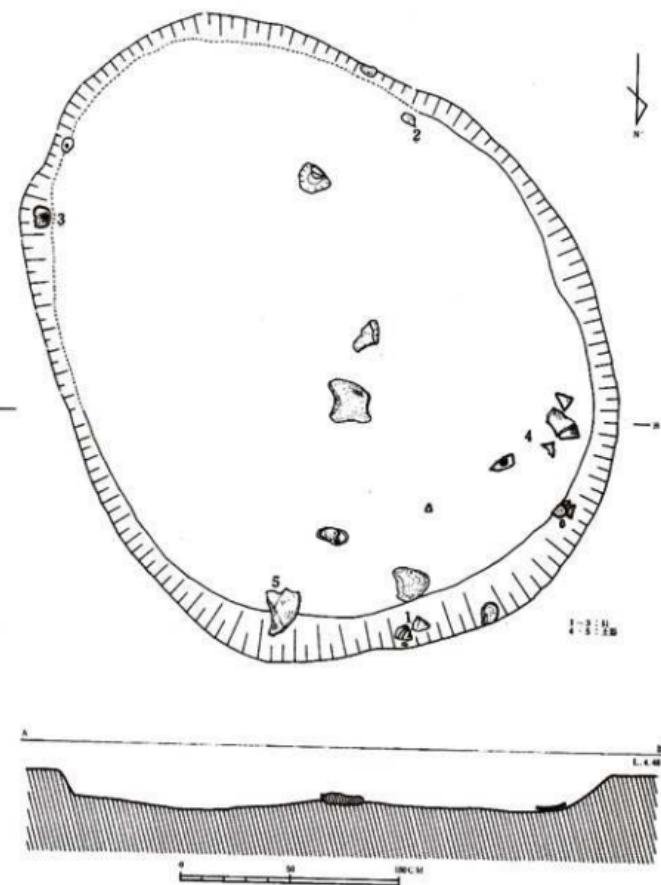
本遺構は出土遺物より見て弥生時代前期に属するものと考えられ、宇宿・佐吉の住居址の時期と比較的近く、柱穴などは見られないが、諸般の状況からみて住居址であったと見られる(第9図・第8図・図版第三)。

B-Ⅱ区ピット

第1地点北地区B-Ⅱ区5層を主とし、B-Ⅲ区5層へかけて検出された略椭円形のピットである。長径151cm、短径126cm、深さ40cmで、北方向へ、長さ110cm、幅70cm、深さ18cmの溝状の分枝を有し、その先端は長短の2叉に分れている。最深部には南北83cm、東西26cmの椭円形の狭い平坦面を有し、西縁にオオツタノハ製貝輪が検出された。

本遺構も第5層が、第6層中へ落ち込んで形成されたもので、埋土中に土器、貝殻などの出土が見られ、特に中央部に、下よりヤコクガイ、サラサバティ、珊瑚礁の扁平な織と重なり、最上部にスイジガイが置かれた状態で出土したのが、底部の貝輪の出土状況とともに注意を引いた。

第9図 B-III区住居址実測図



本遺構の東側に接して、B-I区東北隅からC-II区の西北隅へかけて、5層最下部に径100cm、深さ10cmの円形ピットがあり、なかには、灰と木炭粉の混合堆積が見られた。

上記の円形ピットの北西辺には、長辺12cm、短辺10cm、長さ17cmの柱状の立石がたてられており、火熱を受けた状態から見て、当時は、基部は埋設され、頭部の5cmだけが地表に出現していたことが判明した。なお立石の上面には叩打のあとが見られる(図版第4下)。

上にあげた椭円形ピット、円形ピット、立石の3つの遺構は層位・遺物・相互の関係位置などから見て、同一時期の一連の遺構と考えられる。弥生時代前期に属するものであろう(第8図・第12図)。

円形ピットは灰と木炭の堆積状況から見て、くりかえし焚火を行った跡であろうと思われ、立石の円形ピットに対した面が、火熱を受けた痕跡をのこしているのもこのためであろう。円形ピットが屋外炉であった可能性もあり、また椭円形ピット、立石とも関連して宗教的行事の行なわれた場であることも考えられる。これらの遺構はB-I区5層の住居址の北方1mたらずの位置にあり、同時期に属するものであるから相互に関連する遺構として考えるべきであろう。

ピット内には底面に密着して、中心よりやや西側よりに、拳大の円錐が集積され、これを囲んで、ピット内部から北側外辺へかけて多量の貝殻が出土した。これらの貝殻群にまじって土器片も出土し、特に北東部ではピットの内外にわたって多く検出された。この外貝殻群中には角錐・珊瑚礁錐も伴出した(図版第五)。

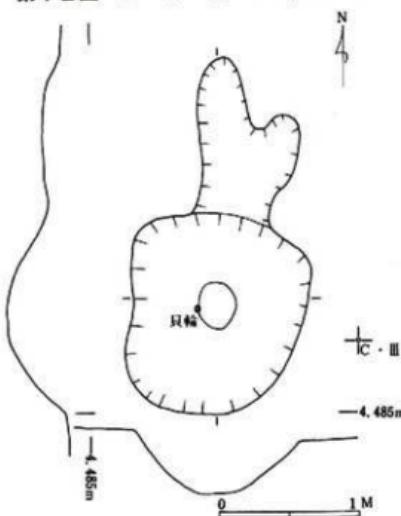
B-I区貝群を有するピット

第1地点北地区、B-I区北西隅5層の貝群を有するピットである。第6層中に掘り込まれたピットで、南北186cm、東西118cm、深さ28cm、平面形は略卵形を呈し、北東部に、幅6cmの粗く浅い溝が分岐して60cm程延びている。

ピット内には底面に密着して、中心よりやや西側よりに、拳大の円錐が集積され、これを囲んで、ピット内部から北側外辺へかけて多量の貝殻が出土した。これらの貝殻群にまじって土器片も出土し、特に北東部ではピットの内外にわたって多く検出された。この外貝殻群中には角錐・珊瑚礁錐も伴出した(図版第五)。

ピット内から出土した円錐はいずれも珪岩で、選択して配置されたもので、偶然の結果ではない。集積した貝殻は殆どサラサバタイで、オラガイ、ヤコウガイ、シャコガイ、アツシデガイなどが一

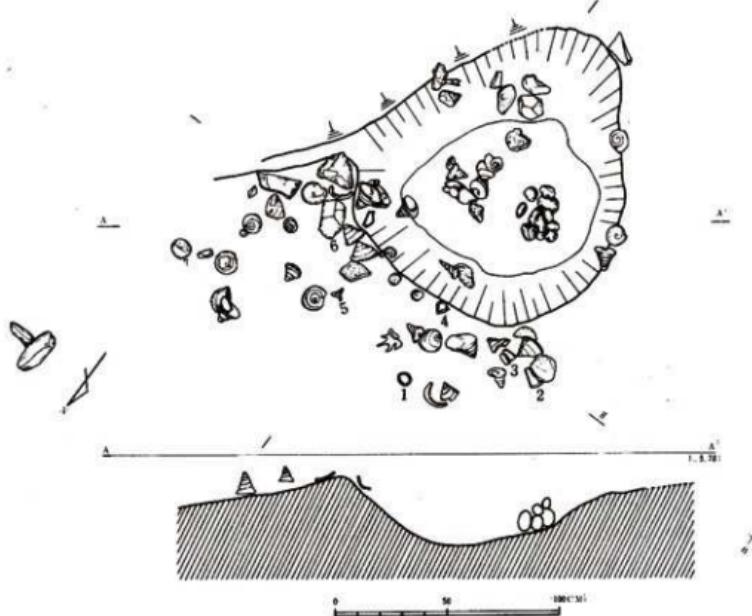
第12図 B-II・III-5下pit 実測図



B-II区砾群を有するピット

第1地点北地区、B-II区北西隅5層の砾群を有するピットである。第6層中に掘り込まれたピットで、南北136cm、東西118cm、深さ28cm、平面形は略卵形を呈し、北東部に、幅6cmの細く深い溝が分岐して60cm程延びている。

第10図 B-II区砾群を有するピット実測図



二個づつまざっているが、これらのなかには穿孔された特殊なものが見られる（第10図・第3図・図版第二七右、図版第二六7、第47図1・第52図1）。

ピットと関連のある遺物として、ピットより東60cm余の地点に壺形土器が出土している（第11図）。口径84cmの大形のもので、口縁に刻目を有する弥生前期の土器である（第28図-1、図版第一五上）。

本遺構の特色は、他と異なり埋土中に灰、第11図 B-II-5下 弥生土器出土状況

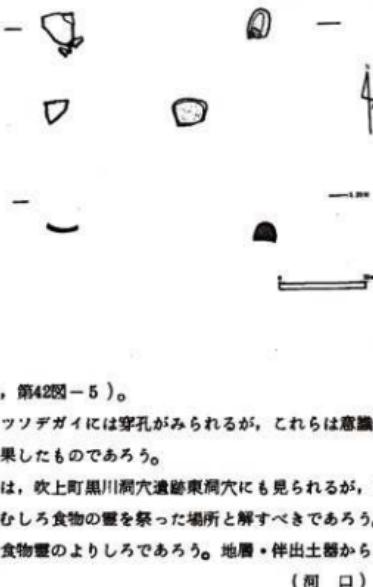
木炭などの日常生活によって生ずる遺物の混入が見られず、ピットの底面、集積した円盤

などにも火熱を受けたあとが検出できなかつた。遺構の中心と見られる円盤は特に選ばれたもので、11個のすべてが珪岩であり、本遺跡から発見された珪岩のすべてであった。

円盤の表面は石灰の付着によって白色を呈していたところから、海浜の円盤を探取してきたものと思われるが、奄美における珪岩の分布は本島の南西端から加計呂麻島西部、与路島、請島西部に見られる名音珪岩層のみであるから、これらの地域の海浜から海路によつて探取してきたものであろう（図版第二五-7、第42図-5）。

集積した貝のうちホラガイ、ヤコウガイ、アツシデガイには穿孔がみられるが、これらは意識的に配置したものと見られ、呪具としての役目を果したものであろう。

食物残渣をピットに集積して石を配置した例は、吹上町黒川洞穴遺跡東洞穴にも見られるが、これらは単に残渣の捨て場と見るべきではなく、むしろ食物の壇を祭った場所と解すべきであろう。サウチ遺跡の場合も同様で、ピット内の円盤は食物壇のよりしろであろう。地層・伴出土器から見て、弥生前期の遺構と考えられる。



(同 口)

2. 遺 物

a. 人 工 遺 物

土 器

土器については、調査地区別に記述する。当該区域の特色を明らかにし、文化相互の共伴関係を考察するうえにも便宜があると考えられるからである。

第1地点北地区第5層の土器

北地区第5層は弥生前期後半より中期中葉までの土器を主とし、奄美独自の土器を共伴する文化層である。前期の土器には1個体の土器片が広範囲に拡散出土するものが見られるが、中期の生活が重なって営まれたことが、その原因であろう。

弥生前期の土器

壺形土器(図版第一八・上、第81図8~5、図版第一九・7)。

図版第一八上図の土器は、焼成良好、色調は紅褐色を呈し、器面は研磨され、胎土は粒子が細かく、器壁は薄い。内面はこまかに凹凸が全面にひろがっている。多数の細片となって東西1.0m、南北2.0mの範囲に散布していた。

器形は頸部から肩部の破片によって推定されるが、球形の胴部に、内側へ傾斜して口縁部へ細くしまる頸部をつけ、口縁端で小さく外反する器形で安定した平底の土器であろう。肩部と頸部のつぎ目に4条の浅い沈線をめぐらしている。おそらく移入土器であろうと思われる。弥生前期中葉。

第81図3、図版第一九・7の土器は径5.1cmの壺形土器頸部の破片である。胎土は粒子が細かく焼成はきわめて良好である。色調は黄褐色で器面は研磨されているが、風化によって粗面となっている。器壁は厚く1.4~1.65cmあり輪積みのあとをどめ、上塗りの粘土の厚さ2.1mmもある。器形は前者に類するものと思われる。弥生前期後葉。移入土器であろう。

第81図4の土器は径8.8cmの壺形土器頸部破片である。焼き、色調、胎土など殆ど前者と同様で器形なども変化はないものと見られる。弥生前期後葉。移入土器であろう。

第81図5の土器は壺形土器の口縁部である。口径8cm、色調は紅褐色を呈し、胎土は砂粒・雲母を含み、焼成は普通である。口縁部はナデ仕上げである。弥生前期中葉。

壺形土器(第28図1・3、第29図5、第30図8・4、図版第一五上下、図版第一九8、図版第二〇5・6)

口縁部に凸唇をめぐらし刻目を施したもの(第28図1・3、第29図5、図版一五上下、図版一九8)および、口縁部が外反し、口縁端に刻目を施したものがある(第30図8)。

いずれも口縁部の径が最大で、胴のはりがすくなく、大きな平底の土器である。

第28図1、図版第一五上の壺形土器は、口縁部外側に凸唇をつけ、口縁端は平坦面をつくる。胎土には砂粒を僅かに混じ、焼成良好で、色調は外面は褐色で黒斑を有し、内面は灰白色を呈し底部付近にはこげつき跡が見られる。口縁直下は横ナデ、以下全面に刷毛目を施しその上を縱に範磨きを加え、表面はやや平滑であるが、内面は粗い。移入土器であろう。

第28図8、図版第一五下の變形土器は、口縁部は内外に膨脹し、口縁端は平坦面をつくる。口縁下にはやや間隔をおいて凸帯をめぐらしている。胎土は粒子が細かで、焼成は良好である。色調は凸帯を界として、上部は黒色、下部は褐色を呈し、やや焼けただれた面が見られる。内外ともに刷毛目を有し、とくに内面には輪積部分に、指頭の圧痕が並列して見られる。

第29図7、図版第二〇・5・6の土器は、口縁部外側に凸帯をめぐらし、口縁端は平坦面をつくり、この面に小円による連点文を2列に配し、要所に8列の部分を加えて施文している特殊なものである。同様の連点文は吹上町入来遺跡、川内市大小路遺跡などに見られるので奄美における地域性を見る必要はない。胎土は細かく、焼成良好で、色調は口縁部付近は紫黒色、胸部は紅褐色、内面は灰褐色である。内外面ともに刷毛目が見られ、内面には輪積部分に指頭の押圧痕の並列が見られる。口縁内面には火熱を受けたために生じたと見られる小さな「す」が集中している。

第30図8の土器は口縁部が外反し、口縁端部はまる味をおび、全面に刻目を有する古い形態のものである。口縁部の外反部内面に刻目を施した特殊なもので、奄美における付加文様であろう。胎土は質が密で焼成は良好であり、色調は表面は灰褐色、内面は褐色である。以上にあげた變形土器は弥生前期中葉～後葉に属すと見られる。

鉢形土器（第30図13～15、第31図6・8）。

深鉢形と浅鉢形の二種類がある。深鉢形は平底で胸部が僅かに張った器形である（第30図18）。浅鉢形は同じく平底で胸から口縁部へ直線的にひらいたもの（第30図5）と、やや彎曲しつつひらいたもの（第30図14、第31図6・8）とがある。

胎土は粒子が細かであり、第30図14は雲母を混じ、第31図8は白色の粒子を含む、焼成は第30図15が良好であるが、他はいずれも不良でもろい。色調は褐色または黒褐色である。胎土、焼成等より見て地元で生産されたものと思われる。器形より見て前期に入れた。

弥生中期初頭の土器

變形土器（第28図2、第29図1～3、第30図1・2・5・7・9～11、第31図1・9、第32図1・2、第33図1・5、図版第一九1、図版第二〇1・2、図版第二一1・12・8・16・17、図版第二二10・11・19、図版第二三1・6・7、図版第二四1、グラビア表頁）。

中期初頭の變形土器には、口縁外側または口縁下、およびその両方に凸帯をめぐらすものと、凸帯を有せず口縁端が外反するものがある。凸帯を有するものには次の三種がある。

1a 凸帯をめぐらすもののうち、口縁外側および口縁下に張出しの短い凸帯をめぐらすもので、腹部の張りがすくなく、平底に終る器形である（第28図2、第30図10、第32図1・2、グラビア表頁、図版第一九1）。第28図2、第32図1・2は口縁部が僅かに外反し、口縁端は外方へ傾斜するが、第30図10は口縁端部が内外に張り出し、平坦面をつくる。

この器形には特殊な文様を施したもののが見られる。第32図1・2であるが、1は口縁と口縁下の凸帯との間に籠描きの不規則な曲線8本を組み合せて、一見花柄と見られるような文様を描き出し、その両側に横位の平行沈線8本を施し、平行線間に籠による爪形の刻目を沈刻して格子文様を描き出したもので、グラビアの表頁に掲載したものである。

2は口縁上面から腹部へかけて範描の沈刻線文様を施したもので、口縁上面には縦位の平行沈線、腹部には間隔をおいて縦位の沈線を描き、その間を縦線を軸とした平行斜線でうめたものである。これらの文様は本来の弥生式土器には見られないもので、奄美において付加されたものと見られる。とくに2の土器の文様は寄念1式の文様との類似が注意される。

Ia の土器はいずれも刷毛目が施され、横なでを加えたものもあり、焼成は良好で、色調は紅褐色、黒褐色または褐色を呈し、弥生式土器の特色を示している。しかし胎土について見ると、第80図10、第82図2が砂粒を混じて弥生的であるのに対し、第28図2、第82図1は貝粉と思われる白粒子を混じ、とくに第82図1の場合粒子が大きく、多量に含み奄美の土器製作手法が感ぜられる（グラビア表頁）。

Ib 外反する口縁下に1条の凸帯をめぐらすものである（第30図2）。口縁端は円味を有するものと、外側へ傾斜し平坦面を有するものとがある。腹部は僅かに張り平底に終る。

第30図2の土器は焼成良好で、器面は褐色であるが、煮沸によって口縁および凸帯の部分は灰黒色を呈している。内外ともに窓痕がみられ、内面には輪積み部分に指頭圧痕が並列している。

Ic 外反する口縁外側に凸帯をめぐらし、口縁端に平坦面を有するもので、腹部の張りはすくなく、平底に終る器形である（第29図8、図版第二二1・11・19）。胎土は細かで焼成は普通である。口縁端と腹部は刷毛目の上に窓痕を加えている。色調は黒褐色。

中期初頭の變形土器で凸帯を有せず、口縁端が外反するものにも次の三種がある。

Iia 口縁が外反し、腹部は僅かに張り、平底に終る器形である（第29図2、第30図7）。

輪積み部分内面に押圧痕が見られる。胎土に砂粒を混じ、質は密で、焼成は良好である。色調は黒褐色で口縁部付近にはスヌの付着が見られる。刷毛目仕上げである。

Iib 口縁端は薄鉢状を呈してまるく、やや肥厚し、腹部から底部へ直線的に細まる平底の土器で、器壁が著しく厚く、大形の土器が多い。口径5.8~8.0cm（第30図1・11、第81図1、図版第二二1・8、図版第二二10、図版第二三6）。胎土は細かで砂粒を混じ、焼成はきわめて良く、色調は灰褐色ないし黒褐色または紅褐色を呈し、刷毛目仕上げである。第30図11は胎土に白色の粒子を含む。

Iic 口縁部は外反し、腹部は僅かに張りのあるものと、直線的に下るものとがある。平底の土器である。口縁部内側がやや肥厚して斜の平坦面をつくり、腹部内面との界に棱線を生ずるのが特色である（第29図1、第30図5・9・16、第33図1・5）。一般に器壁の厚いものが多いが、第29図1のような例外もある。第33図1・5に見られるように、口縁部内側の平坦面に縦に浅い平行沈線を施すものがある。胎土に砂粒を含みまれて小窓を混ぜるものもある。焼成は良好で色調は紅褐色を呈するものが多い。刷毛目仕上げであるが窓削りの痕をのこすものが見られる。第33図5は胎土に白色の粒子を含む。

第29図1の土器は内外ともに貝殻条痕をのこし、外面ではその上をナデ仕上げまたは刷毛目仕上げを施している。この土器も輪積み部内面に圧痕がみられる。

變形土器の底部（第34図14・15・17・18、第35図4・5・8・31）。

上に述べた變形土器の底部には第34図15、第35図31の薄い底部の外に、第34図14・17・18、第35

図4・5・8に見るような厚いもの、あるいはやや上げ底風の厚い底部がつくものと見られる。これらは北九州において前中期から中期へかけて、壺形土器の底部に肥厚するものが見られるのと同じ傾向である。

鉢形土器（第29図4・6、第30図6、図版第二二21）。

深鉢と浅鉢がある。深鉢は口縁端部が内外に張り出して上面が広がり、腹部は彎曲して下り平底に終わる壺形である（第29図4、図版二二21）。胎土には白色の粗い粒子を混じ、焼成は普通である。表面は黒褐色、内面は紅褐色を呈し、煮沸に使用したこと示している。刷毛目仕上げである。

浅鉢は口縁部は肥厚し、口縁端はまるみをもち、外傾するもの（第30図6）、あるいは内傾するもの（第29図6）がある。平底の浅鉢と思われる。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、色調は黒褐色である。第30図6は箇削の度があり更に研磨されており、第29図6はやや粗成で内面に条痕をのこしている。

弥生中期中葉の土器

壺形土器（第30図8、第81図2、図版第二二18）。

中期中葉の壺形土器は資料が少なく、僅かに2点出土したのみである。口縁部は逆「L」字状に屈曲し、厚い口唇部の側面に凹線を有するもの（第30図8）で、腹部は断面三角形の凸帯2条をめぐらしている（第81図2、図版第二二18）。胎土には砂粒を含み、質は密で焼成は良好である。色調は表面黄褐色、内面灰褐色を呈し、器面は研磨されている。

壺形土器（第29図7、第88図2～4、図版第一九5、図版第二一2～4、図版第二二6・7）

口縁部が逆「L」字状に屈曲し、腹部はやや張り出した平底の壺形土器である。口縁上面に小さな山形凸起を有するもの（第29図7）、口縁上面に縦の平行沈刻線を施文したもの（第88図2～4、図版第二一2～4、図版第二二6・7）がある。前者は胎土に砂粒を混じ焼成は良好で、色調は黒褐色を呈し刷毛目仕上であるが、後者は胎土に白粉を混じたものもみられ、焼成は普通で、質のもうろいものも見られ、色調は黒褐色または黄褐色である。

外耳を有する壺形土器（第88図6～14、第84図1～4、図版第一九4、図版第二一6・18、図版第二二14）

腹部が著しく張り出して最大径が口縁部の径を越えるもので、口縁部は外方へ屈折して上面に平坦面をつくるものである（第88図8）。口縁下に断面が三角形で、平面形は弧形をなす凸帯を付している。まれに外耳を有するもので口縁部が直口のものもある（第88図7）。本来弥生式土器には外耳を付した土器は見られないから、他の文化との融合による結果であろう。別項を設けて記載すべきであったが、時期が弥生中期中葉と見られるので、ここに掲載した。胎土は粒子が細かで、焼成は良く、黒褐色ないし紅褐色を呈し、器面は研磨されたものが多い。まれに胎土に白色粉を混ぜたものがある。

鉢形土器（第30図12、第34図10）

直口に近い浅鉢で、口縁下に断面3角形の凸帯をめぐらすものである。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、刷毛目仕上げである。

北地区5層出土の奄美系土器（第34図5～9・11、図版第一九6、図版第二二1・2・16、図版第二三8）

北地区5層出土の土器では、前期から中期中葉へかけての弥生式土器が主体を占めるなかで、これと共に伴関係にある奄美系統の土器と思われるものが若干出土している。これらは奄美の先史文化と弥生文化との関係を知る上で重要な点となるものである。

キヤリッパー形土器（第34図8、図版第一九6）

頸部が張り出し、内傾した頸上部から頸部へ外反し、更に口縁部で内彎する平底塑形土器である。文様は頸の上部に浅い凹刻線を水平に1条めぐらし、これを基線として、同様に浅い凹刻線を、口縁部へかけて、弧状に不規則に重ねて施文したものである。器壁は割合に薄く、華奢な感じをあたえる。焼成は普通で、色調は表面は黒褐色、内面は紅褐色である。口縁部内外には炭素の付着が見られ、煮沸に使用したことと示している。口径17cm。

兼久式祖形土器（第34図9・11、図版第二二2・8）

兼久式に類似点が多く、先行する型式と考えられるので、仮に兼久式祖形土器とした。

頸部が僅かに張り、口縁下に断面三角形の凸帯を1条めぐらす。口縁部は僅かに外反し、口縁端は平坦面をつくる。底部は厚くなる点があり、弥生式土器の底部とはやや異なる。文様は口縁部と凸帯の間に、1条の細い波状の沈線をめぐらしている。胎土は粒子が細かで、焼成は極めて良く、質は密でかつて、他の奄美の土器に見られない特色をもっている。色調は灰黒色で刷毛目仕上げである。口縁部の形には弥生中期の土器に類似点が見られる。あるいはその影響を受けたものともいえよう。

その他の土器（第34図5～7、図版第二二16、図版第二三8）

凸帯、沈線などを施したもので、細片のため器形、文様の全容は不明である。第34図6、図版第二二16の土器は弥生の壺形土器頸部とも見られる。

（河 口）

第1地点北地区第3層の土器

北地区第3層は弥生終末の土器と奄美独自の土器とを共伴出土しているが、第5層と異なり奄美独自の土器が有勢となり、弥生式土器は少なく、且つ弥生式土器の純粹性を失ないかけているようである。

弥生終末の土器（第85図9・10・12・18・18～21・32、第86図7・9・11・13・15、図版第二四6・7）

壺形土器（第85図32、第86図15）

第85図32は壺形土器の胴部と思われるもので、肩部に刻目凸帯1条をめぐらしている。おそらく底部は丸底か。小さな平底であろう。第86図18の丸底と類似の底部と思われるが、胎土から見て同一個体ではない。色調は黒褐色を呈し、胎土は粗く、白粒子を混じ、焼成は悪く、質はもろい。

第86図15は壺形土器の口縁部と思われる。

壺形土器（第86図9・11・18）

9は中期の壺形土器に近い形態で、口縁が外方へ屈折して、内面に稜線を有し、胴部のあまり張らぬ形である。胎土は粒子が細かで焼成がよく、色調は灰黒色を呈し、口縁内外面ともにナデ仕上げである。

11は口縁部が「く」字形に屈折外反し、内面にはなお稜線を残すもので、9に後継する形である。胴部は張りが強く、底部は第85図19～21に見られるような中空の脚台であろう。刷毛目仕上げで、内面の稜線以下に鋸削りのあとが見られる。

18は直口の口縁下に、断面三角形の短い凸帯を、それぞれの末端が重なるようにめぐらしたもので、輪を表現したものであろう。凸帯の一単位には更に連点状の刻目を施した特殊なものである。底部は前者と同様に中空の脚台であろう。形態から見ると8者のうちでは最も後出の様相を示している。焼成は良好で、胎土には細かな白粒子を含む。凸帯の上下に規則的なくぼみをもつなど、他の奄美の土器に見られる手法が施されている。

鉢形土器（第86図7）

胴部から口縁部へ直線的にひらき、口縁端でこころもち外反する器形である。平底であろう。焼成は良好で、表面は褐色、内面は黒褐色を呈し、僅かにひびが見られる。

底部（第85図9・10・12・18・18～21、図版第二四6・7）

第8層には中空の脚台が相当量出土している。これは他の層には見られないもので、弥生終末の時期に属することを示す資料である。底部の薄いもの厚いもの、上げ底の深いもの、僅かに上がったものなどが見られ、胎土にも白粒子を含むものも見らる。焼成も種々である。また仕上げに刷毛目を施したものもみられる。壺形土器に見たように時期的な移行を示すものであろう。

第85図18は本遺跡出土の唯一の丸底の底部である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い、表面は灰褐色、内面は紅褐色を呈している。前述したように弥生の壺形土器底部であろう。

北地区第3層出土の奄美系土器（第35図33・34、第36図1～6・8・10・12・14・16～24）。

壺形土器（第35図34、第36図1・3・18）

頸部が張り、頸部へ細まり口縁部で外反する器形で、平底と推定される。文様は頸部から口縁部へかけて横位の曲線文を平行に、あるいは交叉させて沈刻したものであるが、無文土器も見られる。第36図8のような波状口縁もある。壺形土器としたが、壺形土器の頸部の張りの強いものとともにできる。しかし明らかに壺とする方が適当なものもある。奄美において口縁部が少しある土器が出現するのはこの頃からのようである。弥生文化の影響かもしれない。胎土は粒子が細かで焼成が良く、器壁が薄く、堅密である。刷毛目仕上げのものもあり、胎土に白粉を混ぜるものもある。製作過程で頸部を細めるためにしばっているが、このため頸部内面にひだを生じている。色調は黄色または紅褐色を呈し、煮沸に使用した痕跡が見られない。

壺形土器（第36図2・5・6）

頸部が僅かに張り、口縁部が外反し、口縁下に刻目凸帯を1条めぐらすもので、平底の土器である。文様は第5層出土の兼久式祖形とした土器に見られた波状の沈線文に類似するもので、頂部にまる味をもつ山形沈線文を連続して施したものである。底部には木葉圧痕を有し、木の葉を敷いて土器を製作する技術が伝達、あるいは発生したことを見せる（第36図2）。いわゆる兼久式と称されるものである。この他5・6のような口縁内面に段を有するもの、口縁下に沈線を施すものもみられる。胎土は粒子細かく焼成は良好で、質はかたい。色調は内外とも紅褐色を呈するが、口縁部及び凸帯下は黒ずんでいて煮沸に使用したことを示している。刷毛目仕上げである。

その他の土器（第36図8・10・12・14・16・17・19～24、第35図38）

第36図10・19など鉢形土器と見られるが、多くは細片のために器形文様が明らかでない。しかしこの層では刻目凸帯文・沈刻線文様やその組合せ文様が行なわれたことがわかる。第36図21、第35図38は器面に規則的なくぼみ（笠削り痕か）を有するもので、これも一つの特徴であろう。

木葉圧痕のある底部（図版第二三13～15・19、図版第三〇1・2・6・8・9）

木葉圧痕を有する底部の出土も第3層にかぎられている。使用された木ノ葉は広葉樹で現在でも海浜によく見られるユーナと呼ばれる崖木の葉がほとんどである。木の葉を敷いて製作する技法によるものは兼久式にかぎられるようである。

（河 口）

第1地点南地区第9層(北地区第5層該当)の土器

南地区第9層は弥生前期後半より中期中葉に至る弥生式土器を主とし、奄美独自の土器を共伴することは、北地区第5層と同じであって、両者は同一文化層に属する。

弥生前期の土器(第37図1)

脛部より口縁部へ屈曲内彎し、口縁端でふたたび外反する。脛部と口縁部の境の屈曲部外面に稜線を形成し、直線的に底部へ移行する壺形土器で平底と考えられる。器形は縄文晩期の壺形土器に類似している。刷毛目仕上げである。胎土に白粉を混じ、焼成は悪く質はもろい。弥生前期に属するものと思われる。

弥生中期初頭の土器(第37図2~7)

2・5は北地区的Ibに該当する壺形土器であり、3・4・6・7は同じく北地区的IIaに該当する壺形土器でいずれも弥生中期初頭に属する。胎土には白粉を混じたものもあり、焼成は良好で、質は堅緻である。2・5は火熱を受けた時に生じたと思われる「す」が土器の内外面に無数に見られる。

弥生中期中葉の土器(第37図9)

9は中期中葉の壺形土器脣部の破片である。断面三角形の凸帯を2条めぐらしたもので北地区においても1例見られた。

弥生前期の底部(第37図16)

16はやや上げ底の壺形土器の底部である。器壁は薄く、焼成は良好で、表面は紅褐色を呈し、刷毛目が見られる。内面は灰黒色で底部は赤色に焼け、側壁は焼けただれ、気泡状の小孔を生じている。

南地区第9層の奄美系土器(第37図10・11・13)

いずれも縦または横位の短い凸帯を有する土器であるが小片のため全容は明らかでない。

第1地点南地区第7層(北地区第8層該当)の土器

南地区第7層出土の資料は少ないが、出土遺物に中空の脚台を出土していることから、北地区の第8層に該当することがわかる。

弥生終末期の底部(第37図17)

上げ底で厚い底部である。北地区にも出土例があり、弥生終末期に属する。胎土に白粒子を含み、焼成は悪く、質はもろい。

南地区第7層出土の奄美系土器（第87図8）

脛部が僅かに張り、口縁部がやや外反する變形土器で、口縁端より脣部へ縦位の凸帯を施したものである。胎土は細かく焼成は良好で、質はかたい。色調は灰黒色を呈する。

（河 口）

第1地点東南地区第3層の土器

東南地区は砂の採掘によって土層の上部をはぎ取られており、第3層と称したのは、現存の地表から数えたものである。したがって本来の地表が現存する南地区の層序にしたがえば第11層になる。これは弥生前期～中期層より、無遺物の間層を隔ててその下部に位置することになる。

この層から出土する土器は、ごく僅かの例外を除いて、殆どが面縄西洞式にかぎられている。

面縄西洞式（第88図、第89図2～4、図版第一六、図版第一八7～12・14・16）

腹の張りが少なく直口の深鉢形平底の土器であるが、口縁部が僅かに内傾するもの、あるいは外反するものもみられる。口縁部外側と、口縁下に太めの蕭鉢形の凸帯をめぐらし、更に上下2条の凸帯を経位の凸帯で結び、その上端を焼成後に穿孔している。

凸帯間に網目状または綾杉状の平行沈刻線を施し、凸帯には箒をもちいて削りとった太目の凹点が連続施文されている。口縁端上面には沈線を1条めぐらすものまたは、角形の連点を施すものがある。

土器表面には刷毛状の工具で器面を調整し、粘土が粒子状または線状となって器面に残存するものがある。内面には貝殻条痕を有する。

胎土は粒子が細かく、要母を混ぜたもの、白粒子を混ぜたものがある。焼成は良好、色調は表面は黒褐色、内面は紅褐色のものが多い。

無文土器（第88図9、図版第一八18）

腹部から口縁部へ直線状にひらき、口縁端は外側へ肥厚し、上端は平坦面をなす。胎土は粒子は細かく、焼成は悪く、色調は表面は紅褐色、内面は灰褐色である。出土例は一例にすぎない。

その他の土器（第89図5・6・8）

5・6は押し引き手法により施文したもので、5は直口で、口縁下に横位の沈線を3条、口縁端に1条の沈線を施しており、6は斜行する平行沈線文を施したものである。施文法は面縄東洞式の系統を引くが、かなり変化している。8は不規則に沈線を施したものである。

第1地点東南地区上層の土器（第89図12・18）

東南地区第1層の土器である。ほとんど遺物を見ないが、12の土器は北地区第5層出土の中期初頭Iaに該当する。18は凸帯を有する破片で、胎土は砂粒を含み焼成は良好である。色調は紫褐色を呈する。煮沸に使用した痕跡がみられる。前者は弥生式土器であろう。（同口）

第2地点Gトレントの土器

第2地点では、遺物の出土がみられたのはGトレントのみであった。Gトレントの地層は北端と南端では堆積の状況に変化が見られ、Ⅲ区では7層、Ⅱ区では8層、Ⅰ区では5層に分れ、北から南へ漸移する間に、Ⅱ区では1層が消滅して新たに2層が加わり、Ⅲ区に至ると8層が消滅するという状況である。したがって遺物も、第1地点のように層による判別が確実に行なえるというわけには行かなかった。したがってここでは、第1地点における型式分類を参考とし、Gトレントにおける層序を勘案して記述する。

弥生中期の土器（第40図12、図版第二〇8・4）

脛部から口縁部へ直線的にひらき、口縁端部で「く」字状に屈曲する器形で、口縁部内側に粘土をはりつけ、内側へ傾斜する平坦面をつくる。平坦面と下部との境に明瞭な稜線が形成されるもので、平坦面には弧形の平行沈刻線を描出するものである。胎土は粒子が細かで、焼成良好、質は硬い。色調は外面黒褐色、内面褐色を呈し、刷毛目仕上げである。

弥生終末の土器（第40図5・6・10・14）

5は壺形土器脣部破片である。脣上部に刻目のある凸帯をめぐらしたもので、胎土は粒子が粗く焼成は良好である。表面は研磨されて平滑、黄褐色を呈する。

6・10・14は鉢形土器である。いずれも焼成良好で、質は緻密で堅い。胎土は粒子細かで色調は紅褐色または黒褐色である。

兼久式その他の土器（第40図1～4・7・11・15、図版第二四2）

第40図1・2、図版第二四2の土器は兼久式である。Gトレントにおいて出土した資料によって壺形土器と甕形土器がセットで存在することが判明した。第40図2は兼久式土器の壺形土器である。脣部が張り、口縁部へしまり、口縁端で僅かに外反する器形である。

脣部から頸部へ移行する位置に断面三角形の刻目を有する凸帯を1条めぐらす。凸帯の上下にはそれぞれ1条の鋸歯文をめぐらしている。口縁下内面には規則的なくぼみが並列している。質は緻密で、焼成は良好であり、表面は褐色を呈し、所々に黒斑がみられる。

第40図1、図版第二四2の土器は兼久式土器の甕形土器である。僅かに張った脣部から口縁部へ僅かに外反し、口縁下に断面三角形の刻目凸帯を1条めぐらす器形で、底部は平底である。輪積の手法が明らかで、内面には押圧痕の並列がみられ、外面でも凸凹があつて接着部分が明らかである。この型式は木ノ葉压痕文を有することも特色となっている。文様は山形文を連続して施文する例がみられるが、本例では凸帯の上縁に沈線を施すだけである。胎土は細かで、焼成がよく、質は堅密である。口縁下はナデ、その他は刷毛目仕上げである。外面は一般に黒色であるが、下部は褐色、

内面は灰黒色である。

兼久式に共伴すると思われるものに第40図 8・4・7・11・15の土器がある。4・7は変形土器に類するもので、8・11・15は変形土器である。

木ノ葉の圧痕を有する底部（図版第二三12・16・17・18、図版第三〇8～5・7）

土器の製作に木ノ葉を敷く手法は、奄美の土器にはまれで、兼久式土器に限られるようである。

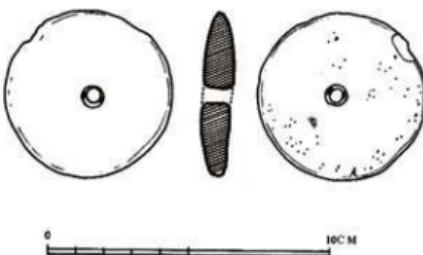
（河 口）

土 製 品

紡錘車（第26図、図版第一七下）

直径6cm、中央の厚さ1.7cm、中心に径5.4mmの孔を有する円形の土製品である。胎土は砂粒を含み、焼成は良いが、表面はやや粗で石灰が付着し白味を帯びている。第1地点北地区、B—I区5層の住居址埋土中より出土した。奄美では初めての発見である。弥生前期に属する。

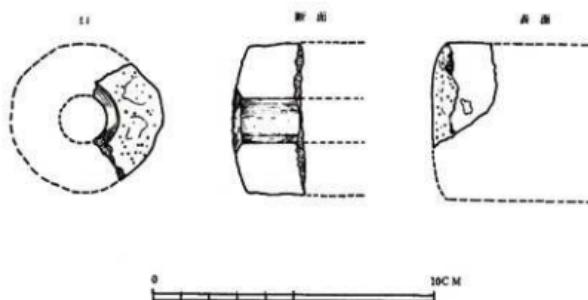
第26図 紡 錘 車



輪口（ふいごのくち）（第27図、図版第一七上）

円形筒形の土製品である。外径5.4cm、中央の孔の径1.75cm、長さは不明であるが、20cm内外であろう。先端は火熱のために焼けただれて赤色を呈し、無数の「す」が見られ、鉄鋸がこびりついている。製鉄のために炉に空気を送る輪の口の先端である。この時期に鉄の製造が行なわれたことを示す。第1地点C—I区8層出土。弥生時代終末期に属する。

第27図 輪 口



円盤状土製品（第39図1）

面縁西洞式土器の破片を円形に加工したものである。欠損して一部を残している。径4.7cm、厚さ1cm。第1地点東南地区E-V区3層出土。（河 口）

石 器

第1地点 第2地点で出土した石器をすべてあげる。主要なものは石斧・石鎌・石槌・凹石・磨石・石錐等である。調査過程においては円礫や破碎礫など多く出土したが、特に加工の加わっていないものは除いた。

A. 石斧

第41図1, 図版第二五 両刃の磨製石斧である。刃部は良く研磨され、側面は敲打による調整を行ない、片面は研磨によって凹面を形成し、他面は中央部に打割面を残して研磨している。断面は橢円形をなす完形品で、斧としての機能を有するものである。刃部には刃の欠けた部分があり、使用のあとが見られる。C-V区5層出土、輝緑岩、長さ10.6cm、幅7.5cm、厚さ3cm。

第41図4 下半部を欠き刃部は不明である。片面に打割面を少し残すが、他面および両側面ともていねいな研磨を施し、いわゆる三味線彫形である。頭部は敲打による裂痕が認められる。両側に平坦面を有する点は、前者と異なる所で、南九州の鶴文後期の石斧とも共通する。E-V区8層出土、輝緑岩。現存長さ8.2cm、幅8cm、厚さ4.8cm。重さ890g。

第41図6 打製石斧、舌状の平面形で、断面は楔状をなす。刃部は鋭利である。長さ10cm、幅8.7cm、厚さ3.4cm、E-V区8層出土。

B. 石鎌

第25図2、図版第二五 南地区9層該当層より、中山清美によって採取されたものである。長さ4.2cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmで、黒色の地に白い線状の斑が見られる。形は二等辺三角形であるが、底辺の両側はそがれている。中央は厚く、両側は砥がれて鋭い刃状となっているが、先端はつぶれ、底辺は磨かれて共に1~1.2mmの厚さをもっている。弥生式土器に伴う典型的な磨製石鎌である。頁岩製。

C. 凹石

第48図2 均整のとれた凹石で完形品である。橢円の平面を持ち、中央部は両面とも軽い敲打痕を残していくばかり、周縁は全面に敲打痕を有し、上下、左右が特に顕著である。BトレンチⅢ区1層出土砂岩(第3紀)1820g。

D. 石錐

第48図1、図版25-4 1個出土した。平面形は均正のとれた橢円形をなし、側面には研磨によって溝をめぐらしている。溝は後の敲打によって部分的に消滅している。錐として製作された後、叩石として転用されたものであろう。片面は自然面を残すが良く磨滅しており、他面は敲打痕が一部に見られる。B-II区2層出土、砂岩。2110g。

E. 磨石(第42図1・2・6・7・9・11・12、第45図3)

9個の出土があり量では最も多い。

第42図1 橢円形の扁平な自然の円礫の縁部を軽く磨ったものである。下端は平坦となるほどよく使用されている。B-V区5層出土、砂岩。850g。

同図2 半月状破碎縫で側縫部が残存している。こまかに研磨がなされ、平坦面と側面の境に稜線を生ずるほどよく、使用されている。C-VI区表採。細粒火成岩。60%。

同図6 平面精円形 断面扁平の均正のとれた石である。Iと同じく手のひらに入り、長軸にそった片方の側縫部を軽く磨っている。他はすべて自然面を残している。D-VI区8層出土。砂岩(茶褐色を呈する) 400%。

同図7 平面精円形、断面扁平の自然円錐である。使用による研磨が著しい。図の上縫部は平坦になるほど使用されている。自然面を残していない。よほど念入りに使ったものである。D-VI区1層下部出土。砂岩。790%。

同図9 扁平な精円錐で側縫部にやや擦った痕跡が見られる。他は自然面である。表採。砾岩。800%。

同図11 平面円形、断面扁平である。側面を磨っている。両面ともに平滑で、あるいは砥磨したものかもしれない。B-II 5層下弥生前中期層出土。砂岩。860%。

同図12 9と同じく均正のとれた扁平な精円錐である。片面中央部が平滑であり、磨かれたものとも考えられるが、自然石の疑いもある。念のため記録した。E-VI区8層出土。粗粒砂岩。1410%。

第45図3 上部は狭く、下部は幅の広い断面精円形の片手でやっと持てる円錐である。上端部が擦られて平坦になっている。他は全部自然面である。両手で持つて使用したと思われる。C-VI区5層下弥生前中期層出土。粗粒砂岩。8180%。

なお第42図7と同様に密に使用された磨石がある。両面と片方の側面を残し、他の縫部を平坦面がいくつもできるほど使用している。GトレンチI区6層出土。砂岩。1050%。

F. 石器 (第42図4・8・10)

第42図4 扁平・精円の円錐の一端の頂部は強い打撃を加えられ一部破損している。他端の頂部および両側面部の一部に敲打痕が認められる。E-VI区1層出土。砂岩。590%。

同図8 断面やや丸味をおびた棒状の石器で、頂部は荒い敲打痕がみられ、すりへっている。一部破損がみられる。下端部、側縫部は軽い敲打痕がある。両面は自然面を残している。E-VI区8層出土。砂岩。890%。

同図10 手のひらにすっぽり入る扁平・精円の円錐で一端の頂部から側縫部に強い敲打痕が観察される。一面の中央部にも敲打による浅い凹部がみられるが、他面にはみられない。B-II区5層下、弥生前中期層出土。砂岩(第8紀)。270%。

G. 磨器 (第42図3、第43図8、第44図3・4)

円錐を打ち割って、側縫部に粗なチャッピングを加えたものをあげだ。

第42図3 円錐を打ち割った内側の剥片の縫部に、細かなチャッピングを行なっている。GトレンチI区1層出土。砂岩。80%。

第43図8 下方に重心のある扁平な円錐の上部に打痕を加え、剥離面を残すものである。整形加工中のものであろうか。C-II区8層。火成岩。1400%。

第44図3 扇平円錐の剥片の縁部に片方から2つのチッピングを加えている。一面は自然面、他面は打裂面をそのまま残している。E-V区8層。輝緑凝灰岩。660%。

同図4 破碎された円錐の縁部に両面からの剥離面がみられる。頂部には僅かながら敲打痕も認められる。BトレンチV区2層出土。砂岩。1540%。

H. 特殊石器

第45図1、図版 第二五 長さ19.8cm、幅14.6cm、厚さ1.08cmである。横円形の自然円錐の側端に敲打による突起部をつくり出したもので、同類は沖永部・与論などの他、本島の嘉徳遺跡でも発見され、奄美全城に分布するものとみられる。重量の大きいのが特色で、奄美特有の石器である。E-V区8層出土。細粒凝灰岩。3800%。

I. 石核・剥片（第44図1・2・5、第45図2）

石器として使用に供したかは疑問であるが、意図的な行為がなされた標としてとりあげた。

第44図1 断面扇平な円錐を、自然面を少し残し他は剥離されている。石材として使用されたものと思われる。B-II区5層。砂岩。1800%。

同図2 自然面を片面に残す剥片である。E-V区8層出土。砂岩。90%。

同図5 かなりの重量の扇平精円錐を半裁し、さらに二次、三次の剥離を行なっている。石核である。B-II区5層出土。砾岩。2840%。

第45図2 円錐の縁部で8面に打裂痕を有する。剥片といえよう。表採。粗粒砂岩。600%。

J. その他（第42図5・18、第45図4）

第42図5、図版 第二五 幅8cm、高さ8cm、厚さ5cmの円錐である。同種の錐11個が貝殻に囲まれたピット内に、集積して発見された。石質もみな同じで、特に選んで集められている。B-II区5層下部出土。珪岩。580%。

同図13 断面円形、棒状の一見小鳥の餌のすりこぎの感じである。全面磨耗あるいは磨滅しており、人為的かどうか判明できず、念のため記録にとどめておくこととした。GトレンチI区2層出土、サンゴ石灰岩（加工品？）100%。

第45図4、図版 第二五 B-II区南東部からC-II区にかけて集中していた灰層の横にあった立石である。高さ20、幅12、厚さ11cmの方柱状で、片面にはサンゴが附着している。底から11cmの所に横位に赤褐色の線が観察され、それから上位は赤茶けており焼けた感じである。地表面に露出し、火熱を受けたと思われる。上面は敲打痕が認められる。B-II区5層出土。砂岩。5860%。

以上に他に石器片？E-V区2層出土、頁岩 640%，剥片・E-M区8層出土、粗粒砂岩、280%，石器片、B-N区9層下出土、輝緑凝灰岩、270%もみられた。

第1表 石器出土一覧表

地点・地区	第1地点									第2地点						計					
	北地区			東南地区			南地区			Bトレンチ	Gトレンチ										
層位	1	2	3	4	5	1	2	3	7	8	9	1	2	3	1	2	3	4	5	6	
A 石斧						1		2													3
B 凹石												1									1
C 石錐	1																				1
D 磨石	2					3	1	2													9
E 石槌						1	1	1													8
F 穿孔器		1						1					1	1							4
G 特殊石器								1													1
H 石核						2															2
I 刺片	1							1													2
J 珪岩円礫						11															11
I サンゴ加工品?																					1
立石					1																1
J 不明							1	1			1										3
計	8	1	1	0	19	2	1	9	0	0	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1	42

- 備考 1. 第2地点Aトレンチおよび南地区の6層以上と、10層以下は石器の出土をみなかつたので除いた。
 2. H・I・Jは利器としては疑問が残るが、あえて加えた。
 3. 珪岩円礫は自然石であるが、特殊な出土状態を示したので加えた。
 4. 第1地点各地区的層位関係は次の通りである。

北地区8層は南地区7層に相当し、同じく5層は9層、南地区11層は東南地区8層にあたる。なお北地区5層は弥生前～中期、東南地区8層は面鏡西洞式期に該当する。

小結

石器の中で特に注意を引くものは磨製石錐である。弥生文化の南漸は土器だけではなく、各要素の組合せとして伝播したことを見せるものである。しかし一面においては、弥生に伴う磨製石斧が太型始刃石斧とやや異なり、短かくて刃部の幅が広く、地域的特色を示すものであることは、南島における從来の生産様式の全面的変革の困難であった事情を物語るものであろう。

一般に石器は少ないが、特殊なものとしては、奄美特有の第45図1、図版 第二五の石器がある。重量があって、特別の形態を示すもので、奄美の先史時代の生活のなかで、独特な用途をもつものであったろう。いま一つは大型の石錐である。2kg以上もある円錐の側縁に浅い溝をめぐらした錐と思われる石器は、何に使用されたものであろうか。一般に錐の出土がほとんどられない奄美において、このような大型の石器が如何なる用途に使用されたものか、謎といふべきである。

(河口・出口)

貝 器

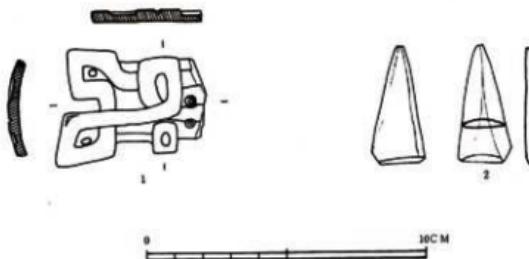
第1・2地点からは多量の貝殻が出土した。貝製品と考えられるものは全部以下に記録した。加工のないものは、各種類もれなく採集し、鑑定をしていただき、その結果を別項に記載した。

A. 貝札

第25図1・図版グラビア裏面。南地区9層該当の層より、里山勇広によって採取されたものである。現存長さ5.4cm、幅4.2cm、厚さ0.4cm、一端は $\frac{1}{3}$ 程を欠いており、完形時は長さ7.6cmに及ぶ優品であったと思われる。欠損部分は研磨されて平滑となり、これに接して、2孔を設け、既存の2孔と合せて再び着装したものと思われる。

形は四隅の張りだした長方形の枚状を呈し、裏面へわずかに彎曲している。表裏とも良く研磨さ

第25図 貝札と石鎌



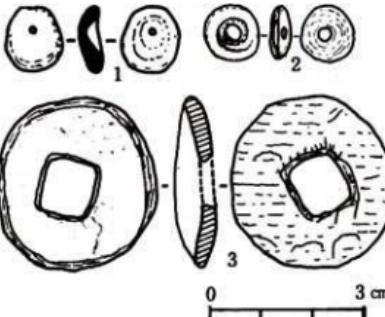
れ、やや黄味を帯びた白色で、美しい光沢を有する。表面には帯文が浮き彫りされ、いわゆる蟹足文類似の文様を形成し、4隅に孔を有した（欠損した部分に2孔あったものと推測される）。種子島広田遺跡下層出土の貝札と同類である。弥生前期～中期に属する。

B. 貝輪

第47図2、図版第二六1 B-II区のピットの底部出土した。内径縦4.2cm、横3cmで、やや小形である。盤頂部を打ち欠き、後丁寧に調整し、研磨して内孔を仕上げている。外面は部分的に研磨しているが、ほとんど自然面が残されている。オオツタノハ製。B-II区5層出土。

第47図4 貝輪の残欠品である。内径は推定縦7cm、横5cmあり、輪の幅は1.25～1.7cmで細い。内孔、底面、外面ともに良く研磨され、底面は凹凸がなく平坦となり、外面は磨かれて平滑となり、わずかに肋の痕跡をのこすだけである。内孔もよく磨かれて着装に好都合であったと思われる。G-I区8層出土。オオツタノハ製。

第46図 貝器（玉飾・貝輪）



C. 垂飾

第46図1・2、図版第二八7～9 イモガ
1個の螺旋先端部を研磨・穿孔したもので、
平面形は円で、表面は球面を呈し、裏面は凹
面に螺旋内の結合部痕跡を鶴巣状にのこして
いる。紐を通して垂飾としたものと思われる。
第46図1は径1.8cm、同2は径1.1cm、図版
第二八7は径2.8cmである。

第36図8、図版第二六2 ヤコウガイの体
殻の一部を取り、略円形に加工し、中央に大
きく穿孔したもので、やや彎曲した円盤状を呈し、外周・孔の縁とともに研磨されてなめらかである。
外面は灰色であるが、内面は真珠光沢を放ち美しい。これが垂飾として加工された所似であろう。
外径3～8.5cm、孔径1cm。

D. 貝斧

第41図2・3・5・7、図版第二八1～8 緒摘みのごときに適した器形と見て貝刀とよぶこと
が提唱された。沖縄県南部の八重山諸島・北部の具志川島などに見られ、奄美諸島では与論島、沖
永良部島住吉貝塚、徳之島面鏡第N貝塚、本島のヤーヤー洞穴などで出土し、宇宿貝塚では同形の
石製品が見られ、定形化した利器であることを示している。ヤコウガイの蓋の薄い縁を、凹面に向
かって打欠き、粗い刃をつくりだしたもので、部厚くて、むしろ鉈器に属する。本遺跡では弥生前・
中期層（北地区5層）及びその上層（北地区3層）、面鏡西洞式（東南地区3層）に共伴出土して
いる。径7.7～8cm、厚さ2～2.5cm。

E. 穿孔貝

人工によって穿孔した貝には、縁部まで成形したものと、貝盤の形態をそのまま残したものとが
あり、貝盤の自然の形態をのこしたものでも、使用目的によって貝の種類が選ばれ、穿孔の方法が
異なるようである。

穿孔貝には從来貝輪の未成品とする見方があり、これを否定し、琉球・台湾などの土俗を根拠と
して貝錘とする説が流布している。しかし貝錘とするには不都合な遺物もあって、ベンダント、鉈
などとする説もある。この他貝に呪力を認め呪具とする考もある。本遺跡出土の穿孔貝遺物には、
上記の各説に該当するものがあると思われる。以下に分類記述する。

周辺加工を施したもの

第47図8・11、図版第二六6・8 ともに巻貝の一部をとて加工したものである。第47図8、
図版第二六6はヤコウガイの盤口の部分を探って成形し、内面より打撃を加えて穿孔している。孔

は丁寧に略円形に仕上げられている。周縁部、孔の縁ともに使用による磨耗が見られる。外面は剥離がはげしいが、内面は真珠光沢を保持して美しい。径 7.2 cm、厚さ 0.55 cm、内孔径 2.5 cm、G-II 区 2 層出土。

第47図11、図版第二六 8、図版第一三下右 上記のヤコウガイ製穿孔貝と重なって出土した。種類は不詳であるが、大形の巻貝の体層部背面をかきとり加工したものである。外周は擦り切って成形し、内孔は内外から打撃を加えて穿孔して、略円形に仕上げており、使用による磨耗痕が見られる。外面には穿孔貝による無数の小さな穿孔があり、内面には螺塔を除去した後の縫合部の痕跡が見られる。前者と共に呪具と考えられ、鍾飾として身に帯びたものであろう。長径約 9 cm、短径 7.5 cm、厚さ 0.4 cm、内孔の径 2.4 cm、G-II 区 2 層出土。

巻貝に穿孔したもの

貝塚では、貝の生肉を取りだしたために、殻の損傷したものが発見されているが、本遺跡は貝塚ではないので、その例は発見しにくかったが、ここには凝わしいものを除いて、貝器と思われるものをあげる。

第47図7、図版第二六 8 ヒメチョウセンフデの加工品である。殻口の裏側をすりみがき、最大径 0.7 cm の内孔を穿ったものである。外唇部は約 2 cm にわたってわずかに欠き、前溝付近を研磨したものである。長さ 7.4 cm、幅 2.5 cm。面繩西洞式に共伴する。重飾であろう。

第47図1、図版第二七右 アツソデガイの殻口裏側に、径約 1 cm の円孔を穿ったものである。前溝付近を平坦に研磨し、殻頂にも磨耗が見られる。縫群を有するビット（第10図、図版第五）より出土している。長さ 11 cm、幅 7.8 cm、相当の重量をもつてるので重飾とは考えられない。出土状況などより見て呪具とすべきであろう。弥生前期に属する。

第58図8、図版第二七左 スイジ貝の殻口付近をのこして螺塔・体層を除去したものである。成形の途中か、成形後一本の管状隣を有する部分が欠損したものである。スイジガイの管状隣は、その特色を端的に示す部分で、ふれることに危惧を感じさせる。この遺物は、この管状隣を有する殻口部をのこす意図が明らかである。呪具であろう。長さ 2.4 cm、幅約 2.1 cm、G-II 区 4 層出土。

第52図2、図版第二六 9 クモガイの体層背面部を除去したものである。管状隣のうち 4 個が折損しているが、加工後偶然に失われたものか、意図的に除去したものか不明である。もし意図的なものとすれば、8 個を残していることは主旨が不徹底である。おそらく前者であろう。長さ 17.5 cm、幅 9.5 cm、G-II 区 2 層出土。呪具であろう。

第52図1、図版第二六 7 ホラガイの殻口内唇部にそって、径 2.6 cm の円孔を穿ったものである。他に体層背面に破缺部があるが、偶然の所産と思われる。縫群を有するビット内に、縫群の直前に出土したものである（第10図、図版第五）。出土状況などを合せ考えて呪具としたい。長さ 17.8 cm、幅 7 cm。弥生前期に属する。

第50図 1～8・5、図版第二八 4～6 タカラガイの加工品である。1・2 はハチジョウダカラで共伴出土したものである。1 は外から打撃を加えて穿孔（径 2 cm）し、二次的に左から右方向に向かって打撃を加えて体層背面を除去し、このとき右側面に剥離面を生じている。一回目の穿孔は丁寧に加工し、ほとんど真円形の孔であったと思われる。2 は右側から打撃を加えて体層背面を除

去しているが、左側面に、あるいは一次の穿孔の痕跡かと思われる部分が見られる。沖縄県仲泊連跡・崎樋川貝塚Bなどに類品の出土が見られ、鍾とされている。

8はホシダカラの体層背面に一次穿孔が見られ、二次的に腹口より左半分を打欠き、同時に内部の螺塔にあたる部分を除去している。この段階で、残存の右半分は容器状を呈し、くりかえし使用されたものと見られ、縁部の磨耗がはなはだしい。以上の3個は面繩西洞式期のものである。

5はヤクシマダカラの背面に、斜に打撃を加えて梢円形の穿孔を生じたもので、右斜上の欠損部は後の偶發的な原因によるものであろう。G帯区2層出土である。

上記の第一次加工の穿孔のあった段階でも、その孔が丁寧にあけられたものは、貝器として使用されたものと思われる。

二枚貝に穿孔したもの

鍾として使用されたもの外に、垂飾として使用されたものもある。貝鍾製作の素材は種類によつて選ばれたようで、沖縄県の遺跡で発見された、貝鍾と考えられたものの種類をみると、シャコガイ、リュウキュウサルボウ、リュウキュウザルガイ、メンガイ、タカラガイなどがあり、先にあげた3種類、なかでもシャコガイが多く用いられており、一般に重量のあるものが選ばれているようである。

垂飾または飾として製作されたものには、ウシノツメ、ザルガイ、メンガイなどがあり、埋葬遺跡で副葬品として発見されている。

本遺跡で貝鍾と考えられるもの

第48図1～5・7・8・10 メンガイ、ウミギクガイの殻頂に、径2～1.5cmの不定形の孔を穿ったものである。殻縁および外面が磨耗し、内孔の縁部にも磨耗が見られ、とくに巻垂による扭ずれの跡が顕著である。

垂飾と考えられるもの

第47図3・9・10・12、第48図6・9・11 メンガイ、チサラガイ、カバトゲウミギク、イタヤガイ、キクザル、シラナミなどの殻頂または殻の中央に梢円形に穿孔したもので、孔の径は4～1cmである。外面および周縁に磨耗が見られない。軽量または小形のものか、第48図11のように内孔の大きなものである。垂飾としたものには東南地区8層出土の面繩西洞式に共伴するものもあるが、貝鍾としたものはいずれも弥生前中期層よりも若い層より出土している。 (河 口)

F. 卷貝製貝匙 (第49図、第50図7～9、第51図6、第53図2、図版 第二九)

匙という表現は判断に迷うが、食器と考えて以下の4種に分類した。

1種(第49図1～5) いずれもヤコウガイを素材とするもので、外面は結節部を1～2条残し、内面は柔らかいカーブを描いて彎曲する。縁辺部は丁寧に磨研している。外面に結節部の凸起が1本伸びているため8をのぞいて不安定である。1・4は結節部内面は溝状に凹み、あたかも液体の吐き口のようで都合が良い。1～4共に完形である。2・8は平面形が類似している。5は基部に抉りが見られるが、割れ口は不自然でなく、意図をもって加工したものであろう。内面は皆ヤコウガイ特有の怪しい光沢を発し、それが南国の太陽にきらめいてさぞ美しいものであったろう。

2類(第49図6・7)

6 ハチジョウダカラの背部を切り抜き、縁部を半円状に摩耗して仕上げたものである。不安定である。E-V区8層出土。7も同様な仕上げであるが、内面は乳白色に輝き、艶があつて美麗である。巻貝であるが貝種は不明である。B-M区7層出土、以上の2個は平面・断面形が類似している。共通の用途に供したものと思われる。

3類(第50図7~9)

7 イモガイの螺塔部を残し、体層部を半裁し、縁部を擦っている。螺塔部も研磨されている。

8 ツボイモの体層部を梢円状に残し、一辺には抉りを入れ、縁辺部を擦って仕上げる。9ニシキミナシの体層部を8と同様に剥ぎとり、対角に抉りを入れて擦って仕上げる。舌状部が匙のように仕上り、螺塔部側の張り出しを親指と人差指で挟むと持ち易い。上記いずれも、巻貝の体層部を使用していること、縁辺部を良く砥研していること、抉りを入れていることなどの共通性をもつている。7 麦採 8GトレンチI区1層 9GトレンチII区1層

4類(第51図6、第58図2)

6 ゴホウラを半裁して、体層部を匙状に仕上げている。螺塔部も削りとられ殻軸が露出している。内外面ともに研磨している。E-V区8層出土。2 ラクダガイを半裁して、体層部の曲線を匙状に仕上げている。柄は外唇と内唇が接し水管を形成する部分であろう。螺塔部が先端部とすると殻軸にひっかかり不便ではないか。内外面、縁部共に研磨して、結節部分と擦り切って仕上げている。GトレンチII区4層出土。

以上、いずれも巻貝を素材とした貝匙状の加工品である。

G. 二枚貝製貝匙 (第51図1~5・7・8、第58図1)

二枚貝の腹縁部を磨って研磨したものがあり、ここにあげた。1 チリボタンガイ 内外面ともに自然面を残す。2 メンガイ 外面にサンゴが附着している。腹縁部および内面を磨っている。3 メンガイ 幅が広い、外面は自然面を残す。4 ウミギクガイ 腹縁部をすり、やや変形、匙状を呈する。5 キクザルガイ 腹縁部と内面を磨っている。7 ウミギクガイ 外面に自然面を残す。これらはいずれも小型であり、自然の貝殻の腹縁部に研磨を少し加えただけである。8と58図1はやや大型であり、磨耗も激しい。8 シャコガイ 内外面と腹縁部ともによく磨研され、全体に丸みをおびている。外面の放射溝、放射肋共に良く擦られてわずかに痕跡を残すだけである。左腹縁部を一部分削り取っている。殻頂部近くの穴は穿孔貝によるものであろう。58図1やはり大型のシャコガイを削り、柄と思われる張り出し部を作っている。内外とも良く磨耗され、特に縁部は丸みをおびて調整されている。外面の放射肋の内面側は浅く凹んでスプーンとして格好である。

H. その他 (第50図4・6・10~12)

第50図4 アンボンクロザメ 螺塔部が磨減している。体層部はわずかに残る。加工品かどうか不明。D-M区8層。なお同様のものが2個見られる。クロフモドキ BトレンチN区1層 アンボンクロザメ G-I区2層。

12 トラフザラ 舶頂近くに長径6mm、短径4mmの梢円形の孔を有する。内面より穿たれてい
る。内面は微皮が剥がれて研磨され、外面は自然面を有している。E-V区5層出土。

6・10 シャコガイ？内外とも磨耗、縁辺部も丸味を帯びている。6は表採、10はG-II区2
層出土。11 ヤクシマダカラ 全面磨耗している。内面の彎曲部は匙状を呈している。12を除
きいずれも磨耗が激しい。加工品と断定しかねるが、急のため記録にとどめた。

以上、A～Hまで8種に分類し記述を試みた。次に出土地区、および層を表にまとめて検討して
みたい。

(出 口)

小 結

各種の豊富な貝殻を使用して、地域的特色のある貝器が多く作り出されている。広田以南において、このような明瞭な形で貝札が発見され、しかも弥生前・中期の文化に関連することが明らかになつたことは、貝札文化の解明に資すると共に、本遺跡の特色を示すものであり、将来への調査の展開に強い興味をいだかせるものである。南島特有の貝舟の出土例を加えると共に穿孔貝が多く出土し、貝錦は若い時代にかぎって出土し、またスイジガイ、アツソデガイ、ホラガイなど呪具的意味をもつと思われるものが見られ興味のあるところである。

ヤコウガイ製の貝匙は周縁部の磨研がいきとどいている。じつに丁寧に擦った跡がみられる。食器として実用するかは疑問の残るところであろう。第49図2・3のごとく小さな不安定な容器に液体ないし、固体物を入れてもすぐこぼれてしまうであろう。また匙としての利用であればむしろ第4類が柄までついて実用的であるし、また第51図8、第58図1のようなシャコガイ製のスプーンがより効果的であろう。わざわざヤコウガイの体側部を切り取り、形をととのえ、磨いて作るのであれば、その光沢の神秘的な輝きに、何らかの意味を求めるべきではないだろうか。

Gトレンチ2層に貝製品の出土が目立った。全体の80%を占めている。周辺加工を施した穿孔貝2個は特殊な出土状況を示した。また貝錦もまとめての出土は注目される。このトレンチは人骨の発見された場所でもあり興味深い。

(洞口・出口)

第2表 貝器出土一覧表

地點・地区 類別 層位	第1地點										第2地點										表 計 採	
	北地区					東南地区				南地区		Bトレンチ			Gトレンチ							
	1	2	3	4	5	1	2	3	7	8	9	1	2	3	1	2	3	4	5	6		
A 貝輪		1		1																	2	
B 貝笄	1	1	2																		4	
C 貝垂飾	1	2																			8	
D 穿孔貝		2	2	2	3	1			1			1	12	1					1	26		
E 卷貝製貝匙	1類						1	1						8							5	
	2類						1	1													2	
	3類												2								1	
	4類						1												1		2	
F 二型貝	小型	1					3		1			1									6	
G 卷貝加工品	大型													1	1						2	
								1													1	
H その他							1						2							1	4	
計	8	0	6	0	5	0	2	11	3	0	1	1	0	0	4	18	0	8	0	0	60	
備考							ホア ラツ ガノ イデ 1ガ 9イ 1		タ カラ ガ ガ イ? ?								クモ ガイ 1 ?		ス イジ ガ イ 1 ?			

備考

1. 第1表の備考1・4項は本表にも同じである。

2. 備考欄の卷貝はGに含まれている。

3. 表採の3個の地點は不明である。

b. 自然遺物

サウチ遺跡出土の人骨所見

内藤 芳鶴

サウチ遺跡から弥生時代人骨が出土し、その出土時における考古学的所見に関しては別欄に述べられているとおりであるが、ここでは人骨の所見について記載する。人骨の保存状態は必ずしも良好ではなく、成人骨1体の一部分であるが、できるだけその接合、復原につとめたので、同人骨の觀察および計測の結果を報告したい。

資料および所見

1 齒(写真1): 図版三一

永久歯3本が遊離して残っていた。齒種は左側上顎の中切歯(I_1)、犬歯(C)および第3臼歯(M_3)である。齒の諸径は概して大きく、3本共にカリエスはなく、咬耗度は I_1 およびCがBrocaの1~2度、 M_3 はほとんど磨耗していない。 I_1 およびCの咬耗状態より臼子咬合であったと推定される。

2 上肢骨(写真2, 3): 図版三二

(1) 上腕骨

右側の上腕骨が残っているが、上骨端部が破損していた。

長径の計測はできないが、骨体はがんじょうで、長さの割りに太く、三角筋粗面もよく発達している。また骨体は扁平である。中央と推測される部位を定めて計測した値は次のとおりである。

中央最大径 (26mm) 中央周 (70mm)

中央最小径 (17mm) 骨体最小周 (64mm)

骨体断面示数 (6.5.8.8)

中央周がかなり大きいのが目立ち、また最大径も著しく大きいが、最小径は比較的小さく、従って断面示数は小さい値を示し、觀察所見と同じように示数值からも強い扁平性が認められる。

(2) 尺骨および桡骨

右側の尺骨および桡骨が残っているが、両骨共に上、下骨端部が破損していた。

尺骨では、骨体が太く、最小周が4.2mm、骨体矢状径が1.6mm、横径が1.7mmで、断面示数は9.4.1.4となり、扁平性は見られないが、周径がかなり大きいことが目立っている。

桡骨では、尺骨に比して骨体の太さは著明でなく、骨体中央と推測される部位において横径が(1.4mm)、矢状径が(1.2mm)である。

(3) 手骨

手骨のうち残っていたものは次のとおりである。

手根骨 右側の舟状骨、月状骨、三角骨、豆状骨、大菱形骨、有頭骨および有鉤骨の7個で、小菱形骨を欠くのみであった。

中手骨 右側の第1、第3および第4中手骨

指骨 右側第1指の基節骨および末節骨、第2指の基節骨、第3指の基節骨および中節骨

残っていた骨について見ると、いずれも長径、横径共に比較的大きいものであった。

3 下肢骨

右側の距骨、蹠骨および舟状骨が残っていたが、破損がひどくその形状は不明である。

要 約

- サウチ遺跡出土の人骨は、同一個体の永久歯3本、右側の上腕骨、尺骨、橈骨、手骨および足根骨であった。
- 歯の咬合型は鉗子状咬合と推定され、咬耗度は比較的弱く、高合者とは考え難い。
- 上腕骨が比較的よく残っていたが、骨体の中央周が7.0cm、最小周が6.4mmであり、諸家の報告と照し合せるとき、男性としても比較的大きい。また断面示数は6.5.8.8で著しく小さく、強い扁平性が認められる。
- 尺骨の骨体も太いが、橈骨では著明でない。
- 中手骨および指骨は大きい。

以上のことから推して本人骨は男性壮年骨として差し支えなく、また歯の鉗子状咬合や上腕骨の扁平性などから古い形質を備えていたものと考えられる。

参考文献

- Martin-Saller: Lehrbuch der Anthropologie Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart, 1957
- 津住瑞雄: 九州日本人(熊本地方人)上腕骨に就いての人類学的研究。熊本医会誌 84(補冊8): 1627-1640, 昭35
- 専頭時義: 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究・人類学研究4(1~4): 273-801, 昭32
- 八木 治: 西北九州人上腕骨の人類学的研究 長崎医会誌 45(1): 22-33, 昭45
- 牛島陽一: 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生時代人骨の人類学的研究 人類学研究1(3~4): 1-31, 昭和29
- 財津博之: 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就て 人類学研究8(3~4): 16-46, 昭31
- 清野謙次他: 津雲貝塚人々骨の人類学的研究 第3部 上肢骨の研究 人類誌 48(第3附録): 179-301, 昭3
- 大場秀夫: 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究 第4部 上肢骨の研究 人類誌 50(第9附録): 1-24, 昭10

サウチ遺跡出土の歯骨について

1977. 12. 14

大塚潤一・西中川駿（鹿児島大学・農学部）

今回、鹿児島県教育委員会文化課より、同定依頼を受けた「サウチ遺跡」出土の動物遺物標本のうち、あきらかに陸棲動物と思われるものについて、別表のように鑑定した。

大量の動物遺物が出土しているが、多くは水棲の動物や魚貝類と思われ、陸棲動物のものは少なかった。そのうちの大部分はイノシシの骨で2cm以下の小骨片ばかりで完全な形態を残している骨はほとんど見当らなかつたが、イノシシは日本本土のものより小型で、リューキュウノイノシシと推定できる。猫が一点のみ出土しているが、家畜であったかどうか推測のしようはない。

なお、[B-II-1下]の表示のあったビニール袋内の歯骨は、すべて明確に同一個体の骨で、小型偶蹄類で、幼若な仔山羊と推定した。しかし、頭蓋の骨から後肢末端の末節骨まで82点が一個所から出土することから考へると住民によって肉が食された後の骨ではなく、一個体がなんらかの理由で地中に埋められたものと推測する。また、長期間地中に埋れていれば消失すると思われる胸骨片まで出土しており、さらに他の骨も幼若でありながら骨端軟骨結合以外はほぼ完全な形狀で出土していることから類推すると、地中に埋めた時期はそれ程古い時代ではないと推定する。

第8表 歯骨一覧表

発掘場所(標本袋の表示番号)(発掘年月日)	動 物	骨 名
A-VI-8 (1977. 8. 18)	猪(仔)	上腕骨(左)
A-VI-5 (1977. 8. 19)	猪(仔)	上腕骨(右)
A-X-1 (1977. 8. 18)	猫	下顎骨と後臼歯(左)
B-II-1下 (1977. 8. 17)	山羊(仔)	側頭骨(左)、後頭骨、頸椎(3個)、胸椎(6個)、仙椎(1個)、胸骨片(2個)、肋骨(3個)、肩甲骨(左右)、橈骨(左、右)、尺骨(右)、中手骨(左、右)、大腸骨(左、右)、下腿骨(左)、中足骨(左)、踵骨(左)、距骨(左)、舟状立方骨(左)、後肢第四趾列末節骨(左)
B-II-5 (1977. 8. 15)	猪	環椎
B-II-5 (1977. 8. 15)	猪	中手骨か中足骨?
B-II-5 (1977. 8. 15)	猪	上顎骨(右)、上顎の第四前臼歯および第一・二・三後臼歯(右)
B-II-5下 (1977. 8. 16)	猪	脛骨(左)

発掘場所(標本袋の表示番号)(発掘年月日)	動 物	骨 名
B-II-5 (1977. 8. 15)	猪	上腕骨(左)
B-II-5下 (1977. 8. 17)	猪	下顎切歯2個, 長骨の破片2個
B-N-1 (1977. 8. 21)	猪(仔)	桡骨(右)
B-N-5下 (1977. 8. 16)	猪	上腕骨(右), 尺骨(左), 大腿骨?
B-N-5下 (1977. 8. 16)	猪	上腕骨(右)
B-N-9 (1977. 8. 9)	猪	蹠骨(左)
B-N-9下 (1977. 8. 9)	猪	上顎第三前臼歛(左)
B-N-9下 (1977. 8. 9)	猪	第四中足骨(左)
B-N-9下 (1977. 8. 9)	猪	脛骨(右)
B-N-9下 (1977. 8. 9)	猪	大腿骨(左, 右)
C-I-5 (1977. 8. 17)	猪	下顎切歯3個, 下顎犬齒(左, 右), 下顎下二後臼歛(右), 下顎骨齒槽部(左), および下顎骨片
C-I-5 (1977. 8. 17)	猪	下顎切歯, 大腿骨?
C-II-3 (1977. 8. 18)	猪	下顎犬齒, 中手骨または中足骨?
C-II-5 (1977. 8. 15)	猪	下顎最後臼歛(左)?
C-III-5下 (1977. 8. 16)	猪	下顎切歯, 上腕骨(右)?
C-N-5 (1977. 8. 15)	猪	上腕骨(左)
C-N-5 (1977. 8. 16)	猪	上腕骨(右), 脣骨(右), 大腿骨(右)?
D-II-5 (1977. 8. 15)	猪	下顎最後臼歛(右)
D-II-表 (1977. 8. 6)	猪	脣骨(左)
E-V-3 (1977. 8. 18)	猪	大腿骨(右)……膨った跡あり
E-V-3 (1977. 8. 18)	猪?	上腕骨(左)?
G-I-4 (1977. 8. 20)	猪?	上腕骨(左)?
G-II-3 (1977. 8. 21)	猪	脣骨(左)
G-II-2 (1977. 8. 20)	猪	中節骨(指列, 左右は不明)

備考 ?は鑑定にやや疑問が残るもの。

崎原サウチ遺跡出土貝目録

鹿大名譽教授 理学博士 平田国雄

- ここに掲げる目録の貝は、大島郡笠利町崎原サウチ遺跡の出土品で、昭和52年1月、笠利町から同定のため、筆者に依頼されたものである。
- 目録の貝67種の内訳は、腹足類47種と斧足類20種である。腹足類47種の中には、陸産貝2種、オキナワヤマタニシとパンダナマイマイをふくむが、この2種は必ずしも食料としたのではないであろう。陸産貝は貝殻が形成された時代から現在に至る間にまぎれこんだと考へるのが適当である。
- 出土貝はすべて現在の奄美の海に生息するふつう種ばかりである。
- 調査員により加工貝殻片と判断されたものの種名は次のとおりである。
 - 貝さじ：スイショウガイ科（ゴホウラ、ラクダガイ）、タカラガイ科（ハチジョウダカラ）、イモガイ科（ニシキミナシ、ツボイモ）
 - 飾り玉：イモガイ類の螺頭部をすって孔を開けたもの、ヤコウガイ片を円形に成形して、中心に孔を開けたもの、トラフザラやウミギクガイ類に孔を開けたもの。
 - 貝斧：ヤコウガイの蓋のふちを一部欠いて、鋭くしたもの。
- イモガイの頭片やヤコウガイの円片は、間違いなく加工片であるが、トラフザラやウミギクガイ類の孔は採集時に開けた孔であるかもしれない。孔の形がいびつで、不規則である。
- 貝さじは上記3科5種だけであるが、実際には、利用できる大きさと形のものなら、どの種の殻でも利用したであろう。
- 加工しない貝殻も、器具として利用されることがある。イタヤガイの殻は終戦前後はそのまま杓子として利用されたり、与論島では今でも客をもてなすのに、ナガジャコ（シラナミ）の殻が杯として利用されている。

第4表 貝類一覧表

和 名	分 布	備 考	和 名	分 布	備 考
腹足類			7. サラサバティ	奄美以南	
おおかきがい科			8. チョウセンサザエ	奄美以南	りゅうてんさざえ科
1. ヨメガカサ	北海道南部以南		9. コシダカサザエ	房総以南	
2. トラフザラ	奄美以南		10. ヤコウガイ	奄美以南	貝環・貝斧
みみがい科			11. スガイ	房総以南	
3. イボアナゴ	紀伊以南		12. オオウラウズ	奄美以南	
にしきうずがい科			13. アマオブネガイ	房総以南	あまおぶねがい科
4. イシダタミガイ	北海道南部以南		おにのつののがい科		
5. ニシキウズ	紀伊以南				
6. ギンタカハマ	房総以南				

14. オニノツノガイ 紀伊以南	39. イトマキイモ 奄美以南
15. コオニノツノガイ 土佐以南 すいしょううがい科	40. ニシキミナシ 土佐以南 貝さじ
16. マガキガイ 房総以南	41. ワボイモ 奄美以南 貝さじ
17. スイショウガイ 房総以南	42. アンボンクロザメ 奄美以南
18. アツソデガイ 奄美以南	43. クロフモドキ 奄美以南
19. ゴホウラ 奄美以南 貝さじ	44. キバタケガイ 奄美以南 からまつがい科
20. クモガイ 紀伊以南	45. コウダカラマツ 土佐以南 やまたにし科
21. ラクダガイ 奄美以南 貝さじ(大)	46. オキナワヤマタニシ奄美以南 おなじまいまい科
22. スイジガイ 紀伊以南 たからがい科	47. パンダナマイマイ 奄美~沖縄
23. ハナマルユキ 房総以南	斧足綱
24. ハチジョウダカラ 土佐以南 貝さじ	ふねがい科
25. ヤクジマダカラ 房総以南	48. エガイ 房総以南 うぐいすがい科
26. ホシダカラ 紀伊以南 ふじがい科	49. クロチョウガイ 紀伊以南 うみざくがい科
27. ミツカドボラ 紀伊以南	50. メンガイ 紀伊以南
28. ホラガイ 紀伊以南 おきにし科	51. ミヒカリメンガイ 土佐以南
29. オキニシ 房総以南 やつしろがい科	52. カバトゲウミギク 紀伊以南
30. ウズラガイ 房総以南 あくきがい科	53. チリボタンガイ 房総以南
31. サツマツブリ 紀伊以南	54. ウミギクガイ一種 いたやがい科
32. ツノテフレイン 紀伊以南 えぞばい科	55. チサラガイ 紀伊以南
33. スジグロホラダマシ紀伊以南 いとまきばら科	56. イタヤガイ 北海道南部以南 いたばがき科
34. イトマキボラ 紀伊以南	57. ワニガキ? 紀伊以南
35. ヒメイトマキボラ 房総以南	58. オハグロガキ 紀伊以南 まんしちざるがい科
36. チトセボラ 伊豆以南 ふでがい科	59. カワラガイ 土佐以南 しゃこがい科
37. ヒメチョウセンフデ奄美以南 おにこぶしがい科	60. ヒメジャコ 紀伊以南
38. コオニコブシ 紀伊以南 いもがい科	61. ヒレジャコ 土佐以南

62. シラナミガイ 奄美以南 まるすだれがい科	65. ヒメアサリ 本州以南 しおさざなみがい科
63. ホソスジイナミガイ 紀伊以南	66. マスオガイ 土佐以南
64. スダレハマグリ 九州以南	67. リュウキュウマスオ紀伊以南

以上

第5表 奄美サウチ遺跡出土魚骨分類表

今井貞彦・四宮明彦

1. タイ科 Sparidae のマダイ *Pagrus* の頸歯
2. ベラ科 Labridae のタキベラ亜科 Bodianinae, カンムリベラ亜科 Corinae, モチノウオ亜科 Chaelininae 等の数種の頸歯および咽頭歯
3. ブダイ科 Scaridae のアオブダイ亜科 Scarinae, ブダイ亜科 Callyodontirae, 数種の頸歯および咽頭歯
4. ハリセンボン科 Diodontidae のハリセンボン属 *Diodon*, イシガキフグ属 *Chilomycterus* 等数種の頸歯および棘

出土魚骨リスト

咽頭骨 ベラ型上部	タイプ A	B-II-5	3
"	ガジュ G I	2	
"	B-II 東南隅	1	
"	サウチ(赤ガード)	1	
"	Aトレ6区3層	1	
B	C-III-5	1	
C	G-II-5	1	
		(10)	
ベラ型下部	A	B-II-5	5
"	カードナシ(52-9-12)	1	
"	B-III-5	1	
"	B-II-5下	4	
"	C-I-5	2	
"	C-III-5	1	
"	C-II-3中下	1	
"	B-N-5下	1	
A'	B-VI-9	1	
B	E-VI-8	1	
"	B-VI-9下	1	

咽頭骨	ペラ型下部	タイプB	C-I-5	1
"		G-II		1
C		B-II-5		1
"		サウチ(赤カーフ)		1
"		B-IV-5下		1
D		B-II-5下		1
"		G-II-5		1
E		B-II-5下		1
"		E-VIグリット		1
			(28)	
咽頭骨	ブダイ型上部	A	B-IV-5(下)	1
"		"	B-II-5(下)	1
B		E-VIグリット		1
C		B-II-5		1
"	下部	A	B-II-5	1
			(5)	
頸歯	ペラ型上部	A	G-II-2	3
"		G-II-4		1
"		G-II-5		1
"		D-I-5下		1
"		B-I-5		1
B		B-IV-9	1	E-IV-3 3
"		G-1		1
"		AトレーVI-3		1
"		C-I		1
			(14)	
ブダイ型上部	A	B-IV-9上	1	
"		C-II-5	2	
"	下部	A	G-II-8	1
"		ガジュV		1
"		G-I-5		1
"		E-VI-グリット		2
"		B-IV-5下		1
"		D-VI-7焼砂		1
"		B-IV-5下		1
"		G-II-4		1

頸 鍼 ブダイ型下部	A タイプ C-II-5	1 (10)
ハリセンボン型(上下不明)	A B-II-5 下	1
" "	B-II-5	1
" "	G-II-4	1
" "	G-II-5	1
B	B-I-5	1 (5)
タイ型、上部、max、共	A-VI-9 下	1
" 下部	A-VI-9 下	1
不 明	AトレVII-5	1
	B-VI東南隅 9層	1
	D-VII-7 烧砂	1
	C-I-5	1 (6)
関接骨 左	G-I	1
椎 骨 不 明 種	B-II-5 下オチコミ	1
	C-I-5	2
	AトレVII-8	4
	AトレVII-5	2
	G-II-2	1
錯 鍼 不 明 種	C-II-5 下	1
	B-II-5 下	1
	AトレVII-5	1
	C-I-5	1
	G-II-2	1
	D-I-5 下	1
ハリセンボン型	B-II-5 下(オチコミ)	8
	G-II-2	1
？ イシガキフグ型	B-I-5	1

第4章 総括

1. 繩文・彌生文化の伝播

昭和80年に行なわれた宇宿貝塚の発掘によって、下層から縄文後期の市来式土器・一済式土器が発見された。本土の先史時代遺物の南島における最初の発見であった。その後沖縄本島南部の浦添貝塚からも市来式土器が発見され、更に大島本島南部の嘉瀬遺跡では市来式土器の他に、更に1時期旧い小池原下層式土器が発見された。しかしこれらの移入文化が南島の先史文化に与えた影響は殆ど見られず皆無に近い状態であった。

昭和50年以降における那覇市に近い読谷村渡具知東原遺跡の調査では、縄文前期の轟式土器並に曾畠式土器が発見され、調査を重ねるにしたがって、更に下層より爪形文土器並に指頭圧文土器（ヤブチ式）をも発見するに至った。ヤブチ式土器は、既に沖縄本島の勝連半島に近いヤブチ島の洞穴遺跡や、奄美大島のヤーヤ洞穴より発見されており、昨年8月に熊本大学が行なった奄美大島の高又遺跡の調査では、ほぼヤブチ式一轟式一曾畠式の時間的関係をおさえたとされている。

かく見てくると、南島における縄文前期土器文化の移入は広範囲に渡っており、また爪形文土器・指頭圧文土器（ヤブチ式）は、本土に類似の土器型式があるとはいえる、これを直ちに結びつけることができるか否かについても、確実な判断を下し得るまでには至っていない。また縄文前期の土器文化が南島に伝播した時期に、南島自体に土器文化が既に存在していたか否かも不明である。この問題について些か手がかりになることは、読谷村渡具知東原遺跡出土の曾畠式土器について見ると、土器の胎土、焼成、文様などすべての点から曾畠式土器と判断されるものがある半面、文様は曾畠式に類するものであるが、胎土、焼成など土器製作手法が南島的と感ぜられるものがある。轟式についてもまったく同様である。

奄美大島の高又遺跡における表面採集の曾畠式とされるものを見たが、これもまた同様であった。以上のように縄文前期土器の伝播とほとんど時間的経過なくして、土器に変容が起っていることは、既に土器製作の技術が存在したのではないかと疑わせるものがある。しかし現在調査は進行中であり、やがてこの問題も事実によって解決されるであろう。

いずれにしても縄文文化は、南島においては定着せず、南島独自の文化が生長していくことになった。

弥生時代になって、中期から後期の土器が、沖縄、奄美に廣域に渡って発見されるようになった。しかしこれらの弥生土器が、南島の先史時代文化のなかで、如何なる位置を占め、それと、どのようななかかわりあいをもつのかに至っては、まったく知るよしもなかった。ただ一つ注意されるることは、伊平屋島久里原貝塚においては、中期山ノ口系の土器が、現地で生産されていると報告されていることである。

近時沖縄本島の読谷村木綿原遺跡において、弥生前期の土器が発見され、弥生時代の各時期に渡って交流が行われていたことを、あとづけることができることとなった。しかしながら、これはた

だ南島において、弥生土器が発見されたという事実を知るにとどまって、弥生文化と南島先史文化との有機的なつながりに至っては、依然として何等解明するに至らなかった。

以上にあげた弥生文化南進の足跡が、一步一步解明されていった研究の一環として、サウチ遺跡もとらえられることになった。サウチ遺跡は、面縄西洞式の単純遺跡として始まり、ある程度の空白期間において、弥生前期から中期、更に後期の生活が行なわれ、これと並行して、奄美の当該文化期の生活が重なっていることを示している。これは二つの文化が独立並行したのではなく、一体となって、互に影響し合いながら一つの社会を形づくって行ったのである。

両文化の並行期間は弥生前期より後期末に至る期間であり、これを経て両文化は融合し、新しい文化を生み出すに至った。これが宇宙上層式であると考える。

2. 弥生文化定着の背景

弥生文化的伝播は海路によったことはいうまでもない。海上交通には良港を有することが絶対的条件であり、笠利湾はこの条件を充分に満たすものであった。サウチ遺跡においては、ただ一回の文化の伝播によって、弥生文化が受容されたものではなく、くりかえして、各時期の文化が波及してきたことを示している。このような各時期に渡る弥生文化をあとづけることのできる遺跡は、まさに稀である。

弥生文化を支えるものは水田耕作である。如何に弥生文化の波及が累時におよんでも、基本的条件である水田耕作のうらづけがなければ、たかだか弥生土器を若干遺存する程度に終ったものと思われる。

弥生前期遺跡の立地条件は、自然の低湿地を有し、そのまま水田耕作を行ない得ることにある。サウチの背後の低湿地はこの条件を満たしている。サウチにおいては、水田耕作の成功が永年に渡る弥生土器文化を支えたものと思われる。紡錘車・磨製石器などの弥生文化の各要素がそろっていることも、これをうらづけるものと思われる。

この稻作適地が、自然の障壁をなす山地によって、東南の風、とくに台風の被害から防禦されたことは、欠くことのできない有力な条件となつたであろう。

サウチ遺跡では弥生前期には奄美系の土器文化はみられず、中期初頭から中葉にかけて現れ、弥生式土器と奄美系土器との間で相互に影響が与えられる。この時期は弥生文化が優勢となっているが、水田耕作も軌道に乗つたのであろう。

弥生後期になると、奄美系土器は中期に受けた影響の蓄積と、後期弥生式土器から受けける影響とが重なり次第に定形化への道を歩みはじめる。この時期は奄美系土器文化が優勢となっている。弥生時代中期から後期にかけては人工溝渠が行なわれるようになり、水系の利用が活発になる時期であるが、サウチにあっては、土地が狭隘で、自然のままの低湿地利用による水稻耕作から、人工による水田開拓への余地は、かなり少なかったと思われる。この結果が後期の様相を生み出したものであろう。

3. 弥生式土器と奄美系土器

土器文化の接触と変容

サウチ遺跡において、弥生文化が伝播したのは弥生時代前期中葉である。サウチ遺跡から出土するこの時期の弥生式土器は、殆ど本土から将来されたもので、同時期の奄美系土器は発見されていない。したがって弥生前期は面輪西洞式期より後出のものであることは、明らかになったが、直前の型式は判明しない。

弥生時代中期初頭の様相は弥生式土器と奄美系土器との相互影響に特色づけられる。奄美系土器は胎土に貝を練いた白粉を混ぜ、獨得の焼きあがりを示し、直線文・曲線文を一般に使用し、定形化しない曲線が用いられることがままある。この時期には、弥生式土器のなかに、このような要素をもつものが現れる。例えば第82図1・2の變形土器である。

一方凸帯をもつ弥生の變形土器I_bの器形がそっくり奄美系土器に現れる。兼久式粗形と呼んだもので、第84図9・11の土器である。この土器は焼きも弥生的で堅緻である。この現象は現地において弥生式土器の生産がはじまったことを示すが、一方では弥生式土器の移入も行なわれていたことを遺物は示している。

弥生時代中期中葉は、前述の初頭期と同様な経過をたどっているが、弥生の變形土器の口縁端または内縁に針で描いたような細い平行沈線がしきりに施文される（第88図1～5）。これに対応して凸帯をもつ壺形土器の上腹部に平行沈線を描いたものがある（第84図6）。同様の壺形土器は、宇宙貝塚の上層からも採集（笠利公民館にあり）されているから、かなり広く行なわれたもので、定形化したものといえよう。外耳土器が現れるのはこの時期に限られ、弥生中期の器形に外耳がつくのである（第88図6～14、第84図1・2）。弥生時代中期を概括すると、變形土器を中心とした変化で、壺形土器に関する変動はまだ現われないようである。

弥生時代後期は、弥生式土器に対する奄美系土器の影響は殆ど見られなくなり、前者の後者に対する影響のみが顯著になってくる。とくに器形における変化に注目すべきものが見られる。即ち弥生式土器の特色である壺形土器・變形土器・鉢形土器の器形の分化が、奄美系土器に出現する（第86図1～6・18・19、第40図1・2・7・11・15）。とくに壺形土器は成川式の影響を受けて丸底となっている。

一方中期の奄美系土器である兼久式粗形土器から兼久式への系列は明瞭で、變形土器の外に壺形土器を加え、とくに凸帯は成川式の影響で刻目を施すようになり、口縁部に施される波状の沈線は山形に変化して、直線化の傾向が見られる。變形土器に木葉压痕が現れるのも兼久式の特徴であり、成川式の影響であろう。

變形土器のいま一つの特徴に口縁から縦位の凸帯を施すものがあることである（第37図8、第40図11・15）。

かくして奄美系の土器に画期的な器形の分化がおこり、以後の土器文化の起点となった。宇宙層式について再検討すると、先づ底部には丸底と平底の二類があり、器形には壺形土器と變形土器の存在は確実であり、他にもいくつかの器形があるようである。壺形土器の底部は、喜念貝塚出土

の小形壺形土器（鹿児島考古9号、奄美における土器文化の編年、第24図左下）の例でもわかるように丸底であり、壺形土器は平底と思われ、縦位の凸唇を有するものが見られる（鹿児島考古9号第18図上2、下1）。喜念貝塚出土の小形壺形土器（前掲）とサウチ出土の第86図8の壺形土器を比較すると、その類似性は驚くほどで、差異点は、喜念貝塚出土の土器の口縁部が、肥厚して断面が三角形を呈することだけである。この口縁部の肥厚も、兼久式の口縁下の凸唇に基づくものであろう。また壺形土器に見られる縦位の凸唇は前掲のように、すでにサウチに出現しており、両者がつながりをもつことは明らかである。

以上に述べてきたところから明らかなように、宇宿上層式は、兼久式などの弥生後期該当の奄美系土器に繼承する土器文化ということができ、弥生式土器と奄美系土器の接触によって、新たに発生した文化といわなければならない。

かくてサウチ遺跡の弥生式土器文化と共に並行する奄美系土器文化は、面繩西洞式以後のある時期にはじまり、宇宿上層式の直前に終末を迎え、宇宿上層式土器文化の母体となつた（第54図）。

4. 遺跡の性格

南島における先史時代文化の流れのなかで、サウチ文化は弥生文化の導入によって、生涯形態を革新し、土器文化もこれに伴なう変革をなしとげた。かくして從来不明とされた弥生文化の南島先史文化のなかで占める位置と、これに並行する奄美系文化との関係を、いく分明らかにすることになった。

またサウチ遺跡は、二つの異なる文化が接觸して、両文化がどのようにかかわりあって行くかという経過を、かなり明瞭に遺存するきわめて稀らしい遺跡で、文化伝播の様相を研究室で実験している感すらあるほどである。弥生文化の導入は更に今一つの重要な文化を南島にもたらした。それは製鉄の技術である。第1地点北地区、C-I区8層から轆口が出土し、更に同じく南地点C-VI区7層（北地区8層に該当）のピット内より、鉄器破片の出土を見たことによって証明される。時期は弥生後期にあたる。

（河 口）